
今日から守護霊！？

辻民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日から守護霊！？

【Nコード】

N7092B

【作者名】

辻民

【あらすじ】

「わたしは天乃川怜音。浩哉、あなたをわたしの守護霊にしてあげる」ある日、高校生の瀬戸内浩哉は、あの世の裁判官である天乃川怜音に殺されて彼女の守護霊となる。しかし、それが悲劇の始まりだった。怜音を捕まえようと、あの世からやって来る使者の軍団。彼女の盾になり、幾度も殺されかける守護霊の浩哉。果たして浩哉は怜音を護り切り、元の生活を取り戻すことができるのか！？

零目目（1）：その女、天乃川怜音（前書き）

この小説を書く際、けっこう色々なことにチャレンジしました。内容的にはSF&恋愛(?)といったところでしょうか。読んでいただけたら幸いです。

零日目（１）：その女、天乃川怜音

まさかこんなことになるうとは思っていなかった。ありえない。こんなの、ありえない。認めない。認めたくない。けど、認めざるをえない。だって、証拠はぼくのすぐ目の前に横たわっているから。それはぼくの死体。

倒れたぼくは、ぴくりとも動かない。絶望と恐怖と諦念と疑念の入り交じった目を見開き、口を阿呆みたいにぽかんと開け、九月末の冷たい風が吹き抜ける寒空の下、コンクリートの道路に大の字に寝そべっている。そして、腹には一本のナイフが突き刺さっていた。そのナイフが、ぼくの死因だった。

それはさっくりとぼくの腹に突き刺さり、服を切り裂き、皮膚を貫き、内蔵を抉り、ぼくの生命を奪った。

血は流れていない。よほどそのナイフが上手く刺さっているのか、それとも元々ぼくは血の通っていない人間だったかのどちらかだろう。しかし、血の流れていない死体は、ひどく滑稽なものだった。

小説や漫画の冒頭で、こんなにもあっさりと殺された主人公など、前代未聞だろう。これから剣を握って敵と戦ったり、可愛いヒロインと旅をして世界を救ったり。そんな空想、妄想は塵も欠片も存在しなかった。冒頭にして物語終了だなんて、文字通り、お話にならない。

それにしても、自分の死体が拝めるなんて、滅多に無い経験だ。そしてもう、二度とないだろう。

死んだのだ、ぼくは。

ということは、今のぼくは幽霊だ。

自分の、幽霊としての姿を見ている。わりと普通だ。色素が全体的に少し薄くなった感はあるが、服も着ているし、足もちゃんとあ

る。到底、死んだとは思えなかった。

でも、これだけ目の前に死の証拠が残っているのだ。否定しろというほうが無理である。

『マジで死んじゃったのかよ……』

——いや待て。

ぼくは自分の思考にストップをかけた。死んだという事実よりも、まず《何が起こったか》を調べるのが先決なんじゃないだろうか。だいたい、何で腹にナイフが突き刺さっているんだよ。他殺だろ、これ。

すぐに、ぼくは死ぬ前の記憶を呼び起こした。

たしか、今日も退屈な学校が終了し、流行のテレビゲームをやろうと小走りで家に帰った。テレビゲームに熱中すること数時間後、夕食を食べた。そしていざゲームの続きを、と思ったら、明日の学校でA4のレポート用紙が必要だということに気づき、急いでコンビニに買いに行った。この時、時計の針は夜の十時を示していた、と思う。レポート用紙を購入し、やっとゲームの続きが出来ると思って家路を急いだ矢先、

『刺されたんだっけ……』

で、この有様。

それにしても、誰に刺されたか、まったく覚えていない。気づいた時にはこうなっていた。

はあ。

ため息ひとつ。

——普通、幽霊になったら成仏するしかないよな。

ぼくは空を見上げた。日本全国に張り巡らされている闇を緩和ように、明るく輝く満月が見える。ぼくはまるでその満月に吸い込まれるように、現実から剥離していく感覚を覚えた。

その時——

「やっと死んだのね」

凜と張った声。自信と気品に満ち溢れ、どこことなく高圧的。その

声は闇夜の静寂を切り裂き、一直線にぼくの耳へと突き刺さった。

「こんばんは、瀬戸内浩哉^{せとうちひろや}」

暗闇の中から、一人の少女が姿を現した。

美しかった。

歳は十代半ば。月明かりを受けて銀色に輝く、流れ落ちるような髪。強い意志を秘めた二重の、琥珀色の双眸。華奢な体つきだが、弱々しさは微塵も感じられない。むしろ、その存在感は闇夜を葬り去るくらい、月光を寄せ付けなくらい、神々しかった。

「わたしは天乃川^{あまのがわ}怜音^{レイン}。浩哉、あなたをわたしの守護霊にしてあげる」

その圧倒的な、有無をいわせない物言いに押され、ぼくはいつの間にか首を縦に振っていた。

それが運の尽きだった。

殺されるよりもよっぽどタチが悪い。

ぼくの——彼女の守護霊としての生活が、

こうして幕を開けた。

零目目（1）：その女、天乃川怜音（後書き）

この小説は、既に最終話まで完成しています。なので、連載打ち切りはありません。基本的に週2〜3回の更新を目安に、全部で21話掲載予定です。

ぜひ、最終話までお付き合いください。

一日目（１）：結ばれた赤い糸

これはどういうことだろうか。

普通の、ごくありふれた十七歳、高校二年生の部屋。教科書やノート類が雑然と置いてある勉強机。備え付けのクローゼット。漫画や小説が並んでいる小さな本棚。その上に乗っかってあるCDコンポ。カーテンに滲む朝の陽射。などなど。物は多い方ではないが、とりあえず標準的であることはたしかだろう。

ここまではいい。そう、ここまでは。

問題は以下からだ。

まず床に無造作に転がっているぼくの死体。目は閉じているが、口はぽかんと開けっぱなし。まるでゴミ置き場に転がっているボロボロのぬいぐるみのようだ。いや、ぬいぐるみみたいに可愛くはないけど……。

そして次が一番の問題なのだが。

部屋の壁に沿うように置いてあるベッド。そのベッドの上に、ひとりの少女がすやすやと寝ている。銀色の流れるような髪。白く雪のように美しい肌。華奢な身体。こちらはぼくの死体とは比べ物にならないほど、可愛らしかった。ぬいぐるみなんかより断然可愛い。そして、ぼくはいつの間にか彼女の寝顔に見入っていた。

その時――

ピリリリリリリリリリリリリ！

けたたましい目覚まし時計の電子音が、部屋中に鳴り響いた。

それと同時に、眠っていた少女は大きな二重の目をぱちりと開け、叩き潰すように目覚まし時計のアラームをオフにした。

「んんんんん」

彼女は上半身を起こして背伸びをし、カーテンを開けた。眩しい

陽光が差し込み、部屋を明るく照らす。

「うん。いい朝ね」

彼女はもう一度背伸びをし、ベッドから出た。その時、ぼくと目が合った。

「あら、いたの？」

『「いたの」じゃねえ！』

酷い言われようだ。仮にもこの部屋の主はぼくなのに。

『どういうことか説明してもらうぞ。昨日訊こうとしたら、お前、すぐに寝ちまったじゃねえか。呼んでも起きないし。だから、起きるまで待つてたんだよ』

「あつそ」

『「あつそ」じゃねえ！』

「あんまり叫ばないで。疲れてるのよ」

さつきまで寝ていたヤツが何を言う。

彼女はおかまいなしに、ぼくの部屋にあるクローゼットを開けた。
『何やってるんだよ』

「着替えるの」

そう言いながら、彼女はクローゼットの中をこそごと探る。しかし三秒ほどしてその動きは止まり、彼女はぼくを睨んできた。

「なにジロジロと見てんのよ」

琥珀色の双眸に、怒りの色が帯びる。

ぼくはすっかり竦みあがってしまい、すぐさま部屋の外へ出た。

それと同時に、部屋のドアが大きな音を立てて閉まった。

はあ。

ため息ひとつ。

ぼくは閉められたドアをぼんやりと見つめた。

そして、ふとあることを思いついた。

昨日の夜、彼女が寝てしまった後、ぼくは色々試してみたのだ。

そう、幽霊であるぼくがどのようなことができるのか、ということである。

まず、空を飛べた。これは簡単だった。次に人に話しかけてみた。しかしこれは予想通り、誰も反応してくれなかった。まあ、当たり前だ。常人にはぼくは見えないし、ぼくの声も聞こえない。今のところぼくの姿が見え、声が聞けるのは、彼女ただ一人なのである。

そして、幽霊になってみて一番便利だったのが、障害物をすり抜けられることだ。人や建物も簡単にすり抜けられる。欠点は物に触れられないくらいだ（触ろうとしても体がすり抜けてしまう）。

それはさておき。

ぼくが思いついたことは、この幽霊の特性を最大限利用すること。今のぼくにとつて、目の前のドアをすり抜けることなど、至極簡単だ。

『まあ、ぼくは健全な高校生男子だし。健全な男子なら……ねえ』
邪な心が働いてしまうことも、しょうがないだろう。

ぼくは適当に理由と理屈をつけて自分自身を納得させ、顔をドアに近づけた。

だが――

『何やってんだ？』

うひゃあ！ とぼくは叫んで後ろに飛んだ。心臓がバクバク音を立てて跳ね回る。

『ケケケ、バカだなお前』

ドアの向こう側から、二匹の犬がすり抜けて来た。二匹とも柴犬くらいの体軀だが、一匹は真っ黒で、もう一匹は真っ白な毛並をしている。ドアをすり抜けるということは、勿論こいつらも霊なわけ、しかも彼女の守護霊だ。

『驚かすなよ、黒丸、白丸』

『ご主人の着替えを覗き見しようとするからだ、バカ』

ケケケ、と黒い毛並の犬——黒丸くろまるが笑った。

『黒丸の言つとおりです』

今度は白い毛並の犬——白丸しろまるが言った。

それにしても覚えやすい名前だ。毛の色と名前が同じだもんな。
ちなみに、黒丸はオス。白丸はメスだ。

実は昨日、この二匹から少しだけ事情を聞いた。

彼女は——天乃川怜音は、あの世の住人らしい。あの世というのは、俗にいわれる天国とか地獄みたいなものだ。でも本当は、あの世は三種類あるんだとか。この世での善行、悪行の数で死後に行ける場所が違い、最も良い所が天国と呼ばれ、最も悪いところが地獄と呼ばれる。その中間は煉獄である。

そして、その振り分けをするのが《裁判官》と呼ばれる人たち。

天乃川怜音は、この《裁判官》だったらしい。

「準備できたわ」

彼女はまだ眠たそうに目をこすりながら、部屋から出てきた。彼女はぼくの通っている高校の制服を着て、学生力バンを持っていた。黒のセーラー服。たいした特徴は無い。ごくありふれているタイプのもの。

……ちなみに、ぼくにセーラー服を集める趣味は無い。だとしたら、彼女はどこからそれを持ち出したんだ？

「ああ、これ？」彼女はスカートの裾をつまんだ。「わたしはあの世の裁判官よ。これくらい持つてくること、造作も無いわ」

そんなの当たり前だ、バカじゃないの、といわんばかりに冷たい言葉だった。

しかし——これも黒丸、白丸から聞いた話だが——、そんな《裁判官》である彼女は、あの世で罪を犯したらしい。だから、この世に逃げてきたんだとか。しかし、それで終わりではない。

どうやら、あの世から追っ手が来ているらしい。その追っ手を迎撃するために、彼女を守って戦う守護霊が必要ということ。それが、ぼくや黒丸、白丸の役目。

ちなみに、彼女があのだの世で何の罪を犯したかは、教えてくれなかった。『言ったらご主人に殺されちまう』と、黒丸が背筋を震わせただからだ。

「ねえ」

考え事をしていたぼくは、はっと現実に戻った。彼女が睨んでいる。おそらく、ぼくが考え事をしていて彼女の話を聞いていなかったからだろう。失態だ。彼女の大きな瞳が、鋭く吊り上っている。

『な、なんでしょう？』

自然と敬語が出てしまう。まったく、ぼくは何てチキン野郎なんだろう。怒られるのが怖いからといって、なぜそこまで萎縮する必要がある？ 自分でも呆れてしまう。

「訊きたいこと、あるんでしょ？」

『えっ？』

てつきり怒られると思っていたので、ぼくはいささか拍子が抜けた。しかし、彼女の視線が微動だにせずぼくを捉えているのを見ると、やはり、恐怖心は拭えない。ぼくのチキン中枢が警告を発する。そこで、本当は文句を言うつもりだったが、急遽方針転換した。

『何で、ぼくを殺してまで、ぼくを君の守護霊にしたんだ？』

「あなたが強い靈感を持っていたからよ。靈感が無い人間より、あな人間の方が守護霊として適しているから」

『靈感って……』

心当たりはあった。

たしかに、ぼくは靈感のようなものを持っている。否——持っていた。

ぼくは小学校に入学するまで、常人には視えないものが視えたり、聞こえない音が聞こえたりした。そのおかげで、ぼくは幼少時、周囲の人からは勿論のこと、親からも変な目で見られたことがあり、遂には精神科にまで連れて行かれたこともあった。

しかしある日を境に、それが無くなった。常人には視えないものが視えなくなり、聞こえない音が聞こえなくなった。本当にぱったりと。

まるで人が死ぬように。

それから十一年。ぼくはごく一般人としての生活をしてきた。ごく平凡な日常を送ってきた。

ただ最近、その平凡な日常が変化してきている。特に、ここ一ヶ月。

ぼくに、幼い頃の間、靈感が、徐々に戻りつつあるのだ。つい三日前には、近所の公園で幽霊らしきものがブランコに乗っているのが見えた。なぜ幽霊だと分かったかというと、その輪郭がぼやけていたからだ。

後に調べてみると、最近、その公園の近くで子供が一人、行方不明になっていたことが分かった。

『たしかに、ぼくは靈感があるかもしれない。でも、靈感がある人間だったら、よくテレビに出ている占い師とか霊媒師のほうが、ぼくなんかよりも断然強い力をもっているんじゃない——』

「そんなの駄目よ」彼女はいつでもよさそうに言った。「テレビに出ている霊能力者の中で、本物といえるのはほんの一人か二人。ほとんどの偽者よ。そんな連中を使うより、たまたま見つけた、靈感の強いあんたを使うほうが、よほどマシだわ。それに、あんたなら簡単に手なずけられそうだしね」

おいおい。そうだとしたら、ぼくは相当運が悪いぞ。それに、なんだその言い方は。簡単に手なずけられそう？　まるでぼくが犬体

質みたいじゃないか。

「それと……あんたの体は死んでないわ。あのナイフは、魂を抜き取るためのもの。身体機能を停止させることが目的じゃない。現に血は一滴も流れていないし、傷口も塞がっているでしょ」

「……………」

たしかに彼女の言っていることは正しい。昨夜、ぼくはナイフを刺されたにも関わらず痛くも痒くもなかったし、血も出ていなかった。

その後、ぼくの死体は彼女に担がれて、部屋まで運ばれたのだ。あの世の人って、みんな力持ちなのかな？

イマイチ腑に落ちない点も無いことは無いが、彼女が微妙にいらしている様子なので、質問はこれで切り上げることにした。

「これでいい？　じゃあ、行くわよ」

「行くって、どこへ？」

「あんたの学校よ。何のために、わたしが制服を着たと思ってるの？」

「ちよつと待て。ぼくの死体……ぼくの体はどうするんだよ」

「それは心配ありません」

ぼくは声のした方を見た。そして、驚いて思わず目を見開いた。

そこには《ぼく》が立っていた。その《ぼく》は聖人のように微笑んだ。

「私です。白丸です。今日から私が貴方の体に入り、貴方になりきるのでご安心を」

なんか、いつものぼくとまるで雰囲気が違う。それもそうだ。外見はぼくそのものだが、中身は白丸なんだ。白丸のしっとりとした大人の雰囲気、オーラのようにぼくの体から滲み出ている（本当は犬の霊だが）。

「それとも、私ではなく黒丸が良いですか？」

ぼくは黒丸の方をちらりと見た。奴は下卑た笑みを浮かべていた。やめよう。

黒丸だと、ぼくの品位やクラスでの立場が地に堕ちる。

『白丸がいいです。……じゃあ皆さん、いつてらっしゃい』

「何言ってるの？ あなたも来るのよ」

彼女はそう言いながら、ぼくの首に何かを巻きつけた。それは赤い、紐ひものようなものだった。紐の一端は、彼女が持っている。

『これは？』

「《赤い糸》よ。名前の通り、ね。」

おお、これが運命の——、ってやつか。なるほど、たしかにぼくと彼女の出会いには運命じみていたもんな。もしかしたら、彼女はぼくに気があるんじゃない——

「なにニヤケてんのよ」

冷たい刃のような一言。

そして次の瞬間、ものすごく息が苦しくなった。

なんだこれ？ 息がまったくできない。まるで何かで首を縛られているような——って、おい。明らかにこの《赤い糸》のせいじゃねえか。

「《赤い糸》は持ち主の意志によって、きつくなったり、緩くなったり、伸縮自在に操れるのよ」

うん。ぼくは今、孫悟空の気持ち痛みほど分かる。いや、苦しいほど分かる、か。この場合。

苦悶の表情を浮かべているぼくに見向きもせず、彼女は家の玄関へと向う。自然、彼女が持っている赤い糸に引っ張られ、ぼくは彼女に引きずられるような格好で移動するはめになった。

『ケケケ、まるで犬だな』

犬のお前に言われたくない。

ぼくはとうとう我慢が限界に達し、彼女に向かって叫んだ。

『ちよつと待てよ、お前！』

彼女の動きが凍りついたように止まる。

——やばい。やはり叫んだのはまずかったか。

彼女は、その長い髪を優雅に揺らしながら、僕の方を振り向いた。

怒ってはいなかった。怒ってはいなかったが、しかし……。

「《お前》じゃなくて、《怜音》」

言い方はぶっきらぼう。だが、冷たさは無かった。ぼくは妙に違和感を覚え、それから何かに気づいた。

——彼女は、憂えている。

「わたしのことは《怜音》って呼んで。わたしもあんたのことは《浩哉》って呼ぶから」

『あ……ああ』

それはぼくの勘違いだったのかもしれない。そう、彼女が——怜音が憂えているなんて、勘違いだ、きつと。

考えすぎだろう。

しかし、ぼくの思考はそこで強制的に途切れることになる。

赤い糸がぼくの首を再び締め付けたからだ。

彼女に赤い糸で引つ張られ、彼女の後を、まさに犬のように歩くぼく。そんなぼくの惨めな様子を見てか、黒丸が近づいてきて、ケケと笑った。

『おい。お前、相当ラッキーで凄い人間だぞ』

『それは皮肉か？』

『違う』と、黒丸は声をひそめた。笑っていなかった。目が、真剣だった。

『いいこと教えてやるよ』黒丸は依然小さな声で、ぼくに呟くように言った。『ご主人が自分のことを名前で呼べと言うことなんて、今まで一度も無かったことだ。俺や白丸ですら、それはない。お前、ご主人に相当好かれてるぞ。これは物凄くラッキーなことだからな』

ぼくは黒丸の言ったことが理解できず、ただ首を傾げた。

そしてずるずると怜音に引き摺られ、ぼくたちは学校へと向った。

一日目（１）：結ばれた赤い糸（後書き）

小説中で、台詞の部分が鉤括弧（「」）と、二重鉤括弧（『』）に分けられています。お気づきの方もいらっしゃると思いますが、前者は人間（この世の人間、あの世の人間と関係なく）の台詞、後者は霊の台詞となっております。だから、怜音の台詞は鉤括弧で、浩哉や黒丸の台詞は二重鉤括弧なのです。

三話以降も、「今日から守護霊!？」をよろしくお願いします。

一日目(2)：親しき友人たち(前書き)

一話の後書きで、更新の目安を『週2〜3回』としましたが、『ほぼ毎日』に変更させていただきました。詳細はこの話の後書きで。

一日目(2)：親しき友人たち

転校生という人種は、何故か例外なく爆発的な人気を誇る。まるでその転校生が磁石か、あるいは台風の目にでもなったかのように、人が引き付けられる。転校生が美男美女だったら、それは尚更だ。

あまのがわ
レイン

天乃川怜音も、その例外ではなかった。いや、こいつはある意味例外かもしれない。

彼女は、おそらく転校生史上類を見ない、最高にして最強のモテっぷりだった。

それは男女関係無く、クラスの垣根を越え、学年の隔たりすらも越え、彼女はその一日で瞬く間に学校中の人気者になった。

それほど、怜音は美人だったのだ。

「ねえねえ、天乃川さんってどこの学校から来たの？」

「両親が外国人ってホント？」

「好きな男の子のタイプは？」

「なんでそんなに綺麗なの？」

「髪の毛サラサラ！」

「天乃川って名字、珍しいね！」

「怜音さんって呼んでいい？」

「てか、付き合ってください！」

「むしろ結婚してください！」

「というか、罵ってください！」

と、いった具合である。

しかし、その天乃川現象（ぼくが勝手に命名した）は、なんと《ぼく》にも降りかかったのだ。いや、正確にはぼくではなく、《ぼく》の体に入った白丸にだが（紛らわしいので、これは単純に白丸と呼ぼう）。

ではなぜ、白丸にも被害が及んだのか。それは登校中、怜音と白丸が並んで歩いていたからだ。そこをクラスの何人かに目撃され、

噂が広まってしまったらしい。

ちなみに、白丸の周りに集まっているのは全員男。しかも、モテない連中ばかり。いつの間にか白丸の周りに《モテない同盟》（これも、ぼくが命名。ネーミングセンス、皆無）が形成されていた。

「おい、瀬戸内！^{せとうち} なんてお前が天乃川さんと一緒に歩いてたんだよ！」

しょうがないだろ。あいつの命令なんだから。

「瀬戸内！ お前だけには負けなと思うっていたのに！」

ぼくって、そんなにモテない男って感じだったのか？

「瀬戸内！ 何で俺に彼女を紹介してくれなかったんだ！」

あげられるなら、今からでも君にあげます。ただし、後悔しても知りません。

と、いった具合である。

しかし、その馬鹿な男どもの中にも、分かってくれるやつはいた。「浩哉、お前、なんか変じゃないか？」

色黒の、いかにもヤンキーっぽい感じの生徒。しかし、その愛嬌のある笑みや、明るいキヤラは、多くのクラスメートから親しまれている。

岸京介。^{きしけいすけ} ぼくの、小学校からの親友である。

やはり親友は違うな。ぼくの姿形や声は、彼には見えないし聞こえないけど、今なら彼に向って「ありがとう、我が友よ！」とか言ってやれる。

京介は、その愛嬌のある笑みを浮かべながら、白丸の肩を叩いた。「でも、俺に隠れて彼女つくったなんて、ずるいぞコンニャロ！」
バカ京介！ 違うんだ。お前なら分かってくれると思っていたのに。

「それにしてもあんな可愛い娘、どうやって手に入れたんだ？」

手に入れたんじゃないよ。

……ぼくが捕まっただ。

「その言葉には語弊があります」

『ちよ、白丸!』

ぼくのことを完全に無視し、白丸は縷々と話し始めた。なぜか恍惚の表情を浮かべて。

「手に入れたものではありません。私が申し込んだのであります。ご主人様の、従者にと。ご主人様は快諾なされました。私はその時、天にも昇る気持ちでございました。ああ、今思い出しても、ご主人様の懐の深さに、感動と感激に身震いがします。なんと至福の、そして至高の幸せ。……ですから、私はご主人様のためには、例え火の中水の中——身命を賭して、全身全霊で仕える心持でございます」

「……浩哉、見直したぜ」
『何も気づいてねえじゃんか——っ!』

感動に涙を流す、幼馴染の京介。涙もろい性格は悪くないが、泣きたいのはぼくの方だった。

その後昼休みが来るまで、天乃川怜音と、《瀬戸内浩哉》こと白丸の活躍は、目覚しいものだった。

まず怜音。その美貌もさることながら、頭脳の方も半端なく凄かった。抜き打ちテストで満点を取り、転向初日で教科書が揃っていないくとも、先生の問いかけに全て完璧に答えた（他の人のぶんも答えたりした）。

そして《瀬戸内浩哉》こと白丸も半端なかった。同様の抜き打ちテストで満点を取り（ちなみに、満点は白丸と怜音の二人のみだった）、四時限目の体育のバスケットボールで、一人で二十得点も入れた。

二人は一日でクラスの英雄となった。

そんな英雄たちと、ぼく、そして黒丸は、学校の屋上にいた。
今は昼休み。

間断なくやって来る授業のラッシュから一時的に開放された生徒たちは、多くも少なくもない微妙な猶予内で弁当を食べたり、友達と喋ったり、外で運動したり、あるいは図書室で勉強していたりする。

眼下に広がるグラウンドを俯瞰しながら、白丸が寂しそうに呟いた。

「それにしても、この世の人間の体は不便です。なぜ、こんなにも力が抜けるのでしょうか……」

グウウ、と白丸の腹から音が鳴った。思えば、白丸と怜音は朝から何も食べていない。

ぼくの両親は共働きで、朝はぼくより早い。ぼくは母親が作ったテーブルに置いてある朝食を食べ、同じくテーブルの上に置いてある弁当を取り、毎朝学校へ向うのだ。

今日は怜音に無理やり連れて行かれてしまったので、朝食を食べる暇も弁当を持っていく暇も無かったというわけだ。

『怜音は腹減らないのか？』

ぼくは、屋上の鉄柵に背中を預けている怜音に向けて言った。

「あの世の人間は、基本的に生理現象が無いの。わたしの身体はあの世のときと変わらないから、生理現象は無いわ。……まだ、ね」

『まだ？』

「そう、まだ」

相変わらず口数の少ない女だ。思わせぶりな口調の割に、必要最低限のことしか言わない。ゆえに会話が続かない。ぼくは諦めて別の話題を振った。

『怜音、いまだによくわかんないんだけど……「霊」と「あの世の人間」ってのは、どう違うんだ？』

「霊は魂そのもの。あの世の人間は、この世の人間とほとんど変わらないわ。ただ、生理現象がなかったり、空を飛べたり、霊を見たり触れたりできるという、この世の人間とは異なる特性を持っているけど。でも、同じ人間であることには変わりないわ」

『……なるほど』

怜音の常軌を逸した行動を見ると、あまり実感が湧かないが……。彼女もぼくらと根本的には変わらないのだろう。

会話はまた途切れてしまった。眼下に広がるグラウンドを眺めている怜音の横顔は、どこか切なく、まるで美しい肖像画を見ているようだった。

ぼくは彼女に再び声をかけようとした。だが、その前に、

「あ——っ！」

という甲高い声が耳に突き刺さった。

やって来たのは、和泉梨恵^{いずみ りえ}。その後ろには京介もいた。

小さな顔によく似合うショートヘア。目はぱっちりとした二重。

動物に例えると、猫そのもの。小さな体躯が、より一層動物らしさを感じさせる。

そんな和泉梨恵は、ぼくの数少ない女友達である。

梨恵も京介同様、ぼくの小学校からの親友だ。小学生の時、よく梨恵と京介とぼくの三人で遊んだものだった。その仲は中学生になっても変わらず、高校生になっても同様だった。要するに、腐れ縁ってやつだ。

「ちよつと浩哉！ 先に行かないでよ！」

梨恵が頬を膨らませて怒った。

——しまった！

いつも四時限目が終わった後の昼休みは、ぼく、京介、梨恵の三人で昼食をとるのが日課なのだ。今日は朝からごたごたとしていたので、つい忘れてしまっていた。

「すいません、和泉さん」

事態を呑みこめていない白丸が、とりあえずといった感じで頭を下げて謝った。

しかし、梨恵は困惑した表情を見せた。

当たり前だ。ぼくが梨恵に向って名字で、しかも「さん」付けで呼んだことは今まで一度も無い。いつも「梨恵」と名前で呼び捨て

だ。

ぼくは白丸の耳元でそのことを話した。白丸は納得した顔をし、「じゃあ、昼食を食べましょうか、梨恵」と、笑顔で言った。

ちようどその時、京介が感嘆にも似た声で叫んだ。

「あれ、天乃川怜音じゃん！」

梨恵も怜音に気づいたようだ。大きく手を振り、

「天乃川さんも一緒に食べようよ！」と、楽しそうに言った。

それにしても――転向初日から英雄扱いされている怜音に向って、梨恵は何の臆面も無く、彼女を昼食に誘った。普通はそこに多少の躊躇いが生じるだろう。なんていうか、怜音は今、《近寄りがたい、神のような存在》のようなものだと思う。仮にぼく梨恵だったら、積極的に彼女を昼食に誘おうとは思わない。まあ、それが出来てしまっから梨恵なんだろうけど。

怜音は二人に警戒するそぶりを見せながらも、梨恵と京介に近づいていった。

「んじゃあ、お弁当タイム！」

梨恵はその場に座り、弁当の蓋を開け始めた。彼女の弁当はいつも三段構えだ。一段目にぎつしりとオカズ。二段目にもぎつしりとオカズ……。そんなバラエティーの豊富な弁当は、梨恵が一人で毎朝作っているらしい。そして三段目におにぎりが四つ。これもぎつしりと。

この弁当のスタイルは、中学生の時から変わっていない。

しかしそれだけ食べても、彼女は一向に太らない。太った梨恵なんて見たくもないが、それでも不思議は不思議だった。

京介も座って弁当を広げる。こちらはいたってシンプル。男子が食べる弁当の平均量くらいだ。内容も平均的。豪華でもなければ、特に貧しいわけでもない。それでも、梨恵の弁当と比べると見劣りする感はないが。

そんな二つの弁当を、物欲しそうな目で見ている奴がいた。

そう、《瀬戸内浩哉》こと白丸だ。

「浩哉、お弁当は？」

「実は持つてきてないんです……」

グウウと鳴る腹を押さえながら、白丸は苦笑した。

「なら、俺のを分けてやるよ」

「……ありがとうございます。このご恩は一生忘れません」

京介から差し出された弁当を受け取り、白丸は深々と頭を下げた。
「んなことするなよ、気色悪いな……」

「そうだよ。今日の浩哉、どこか変だよ？ 勉強はやたらとできるし、スポーツも凄いいし。いつものドンくさい浩哉はどこいったのさ？」

そう言いながら、玉子焼きをもぐもぐと食べる梨恵。

——おい、今さりげなくぼくのこと馬鹿にしただろ。

「ねえ、天乃川さんもお弁当無いの？ よかったらあたしのお弁当、分けてあげる！ この玉子焼きなんか、けっこう自信作なんだよ」

「いや、わたしは……」

「ほい！」

梨恵は半ば強引に、怜音の口に玉子焼きを突っ込んだ。

怜音は戸惑いながらも、もごもごと口を動かし、やがて吞み込んだ。

「……美味しい」

「ねっ！ 他にも色々あるから食べてみてよ」

「やめといたほうがいいぞ、天乃川」京介が苦笑しながら言った。

「こいつの料理は、卵料理以外、相当マズイから」

「バカ京介！ そんなこと無いわよ。ね、浩哉」

「は、はい……」

口に含んでいた肉団子（京介のやつ）を吞み込み、白丸は言った。
「ホラね。天乃川さんもそう思うでしょ？」

「うっ！」

梨恵が怜音に同意を求めたその時、怜音が口元を押さえた。顔色がみるみるうちに青くなっていく。

「天乃川、なに食った？」

「……おにぎり」

「くはは、それはこの世で一番危険な食い物だからな」

「京介！」

梨恵は弁当箱の裏で、思い切り京介の頭を殴った。

スパコオン！ という小気味の良い音が、突き抜けるような蒼天に吸い込まれていった。

梨恵は、あははと笑った。京介も、くははと笑った。白丸も笑った。怜音はいまだに口元を押さえたままだった。

だが、ぼくは笑えなかった。

いつもなら、その笑いの輪にぼくが加わっているはずだった。しかし、今、ぼくの姿は梨恵にも京介にも見えない。声も聞こえない。それがすごく、寂しかった。

自分だけがのけ者にされた気分だった。

いや、のけ者ならまだいい。のけ者なら、まだ《ぼく》という存在が彼らの中にあるからだ。

今のぼくは、存在していなかった。ぼくの代わりに存在しているのは、白丸だ。外見は《ぼく》だが、それは決してぼくではない。

そう思うと、無性に腹が立ってきた。

怒りと悲しみが、心の奥底から込みあがってきた。

ぼくはいたたまれなくなり、背を向けてその場から去ろうとした。『待て！』黒丸がぼくを呼び止めた。『ご主人から無断で離れるな。』

お前はもう、ご主人の守護霊なんだぞ。ご主人の許可無く離れるのは、絶対に許されない！』

『お前に何が分かるんだ！』

ぼくは思わず叫んだ。

怜音が、白丸が、黒丸が、ぼくを見た。驚きの入り混じった目。

その視線に、さらに腹が立った。

『お前たちに束縛される覚えなんか、ぼくにはない！』

ぼくは屋上から飛び立った。

振り返ると、梨恵と京介がまだ笑っていた。きっと、また他愛も無い馬鹿な話でもしているのだろう。

それを見てぼくは余計に悲しくなり、学校が見えなくなるまで飛び続けた。

一日目（2）：親しき友人たち（後書き）

前書きにも書きましたが、更新の目安を『週2〜3回』から、『ほぼ毎日』に変更させていただきます。理由は特にないんですが、なんていうか、手元に完成している小説があると投稿したくなる衝動が……。

自分勝手に真に申し訳ありません。こんな作者ですが、四話以降も読んでいただければ幸いです。

一日目(3)：守護霊の悩み

『はあああああああああああああ………』

多分、今まで生きてきた中で一番長いため息をついたであろうぼくは、公園のベンチに座っていた。いや、ベンチの上に浮いていた。座ろうとするとすり抜けてしまっし、浮いていることは特に疲れるわけでもないからだ。

公園にある大きなアナログ式の時計台を見る。時計の針は四時ちようどを示していた。

もう学校の授業は終わっている。帰宅する者は帰宅し、部活がある者は部活、遊ぶ者は遊び、塾がある者は塾。各々が勝って気ままに過ごせる時間帯。そんな時間帯に、ぼくは何で公園にいるのだろう？

もしかしたら、黒丸が追ってきてくれると思っていた。

もしかしたら、白丸が止めてくれると思っていた。

もしかしたら、怜音に《赤い糸》を引っ張られると思っていた。

——だが、そのどれもが無かった。

ぼくが速く飛びすぎたせいもあるが、それにしても、誰かに強く引きとめて欲しかった。ぼくが怜音たちにとって必要な存在であると、示して欲しかった。

『何のための守護霊だよ』

梨恵や京介からも存在を認識されず、怜音たちからも必要とされないぼくは、守護霊じゃなくてこれじゃ浮遊霊みたいだ。

『はあああああああああああ………』

また、長いため息が出た。死にたい気分だ。……もう死んでいるけど。

そしてまた、無性に腹が立ってきた。誰に対してか分からない怒りを、とりあえず物にぶつけてみることにする。

ぼくはベンチに右ストレートをぶちかました。

見事にすり抜けた。

今度はゴミ箱を蹴り飛ばした。

見事にすり抜けた。空振りの反動でこけそうになった。

虚しさが心を包む。

何やってるんだろっ、ぼく？

その時ふと、自分の首に巻かれているものを思い出した。

《赤い糸》。

その端を持つべき人間は、今はいない。

これは……チャンスだ。今なら、ほどこいて捨てられる。

そう思うやいなや、ぼくは首に巻かれている赤い糸を外そうとした。だが、これが思いのほかきつく縛られており、なかなか外すことが出来ない。

ぼくはヨガでもやってるようなポーズをとりながら、懸命に赤い糸を外そうと噴悶した。

——余計に絡まった。

その上、どんどん息が苦しくなってくる。

……ヤバイ。

このままじゃ、文字通り『自分の首を絞める』はめになる。

結局、ぼくは赤い糸を外すのをやめた。朝の時より余計に苦しくなったが、ぼくは外すのを諦めた。苦しいけど、我慢だ。自業自得だし。

でも、この後どうする？

このまま一生、首に巻きつく糸に苦しめられるのか？

怜音に外してもらうのが一番良いが、あの女がただで外してくれとは思えない。それどころか「もっと苦しませてあげる」とか言いそう。それに、あいつのところへ行くのは気が引ける。

あんな啖呵を切ってしまった以上、『ゴメン！ あれは冗談でした！ あはは！』なんて言えるはずがない。男として。いや、もう男としてのプライドなんかズタズタのボロボロだけどね、怜音の前じゃ。

『……………あれ？』

今、微妙に違和感を覚えた。
他でもない、自分自身に。

まるでこれでは、ぼくが怜音のことをよく知っているヤツのようではないか。……………ぼくと怜音が会ったのは、昨日の夜だ。まだ一日すら経っていない。

しかし、今、ぼくは怜音の性格を把握しているような考えをしていた。今だけじゃない。今日の朝も同様だった。同様の違和感を覚えた。

——彼女は、憂えている。

彼女のなにが、ぼくに分かるというのだ。
何も分かっていないくせに。

まるで、頭の中に靄が渦巻いているようだ。全ての輪郭がぼやけて見える。大事なものがあつては分かっているのに、ぼやけた輪郭の中に埋没している。ぼくは手を懸命に伸ばし、大事なものに触れようとした。そこにあるかないかも、分からないのに。

いつの間にか、記憶を探るような感覚の中に、ぼくは溺れていた。なぜだか分からないけど、彼女がもっと昔からぼくの中にいたような気がしたから。

記憶の中で行き着いたところは、空っぽの暗闇だったけど。

その時、眩いほどの光があたりを包み込んだ。考え事はそれによつて強制的に打ち切られ、ぼくの意識は外側に向いた。そして、気づいた。

元々、この公園は人の気が少ない。

この公園も広いは広いが、この近くにもつとここより大きな公園があり、子供や母親たちは必然的にそっちへ流れていくのだ。遊具もそっちの方が断然多い。ここなんて鉄棒と砂場くらいだ。

だから、四六時中、この公園はひっそりとしている。まるで忘れられた場所のように。

そんな寂しい場所に、いつのまにか二人の男が立っていた。

歳は二人とも二十代から三十代くらい。ヤクザのようなサングラスをかけ、さながら天使のように白い衣を羽織っている。それが二人の容貌にひどく不釣り合いだった。いい歳した男が二人、天使のコスチュームを着たつて、可愛くもなんともない。むしろキモい。それに、そのコスチュームとサングラスは不釣り合いだろ。

二人の男はぼくを見ている。いや、正確に言うなら、『ぼくの方』を見ている、か。

二人の男は、ぼくに一步近づいた。けれど、二人にはぼくの姿は見えていない。なら多分、このベンチに座ろうとしているのだろう。『はいはい、どきますよ』

聞こえるはずも無いのに、ぼくはそう呟いて、立ち上がった。

――刹那

ぼくは後方へ吹き飛んだ。ベンチをすり抜け、公園に生えている木をすり抜け、公園と道路を隔てるフェンスにぶつかって止まった。蹴られた。あのヘンテコな天使もどきのコスプレ（なぜかサングラスをかけているけど）をした男に。

ありえないことだ。霊であるぼくに触れられる人間は、怜音以外いないはず。

けれど今、確かに蹴られた。その証拠に、腹部がズキズキと痛む。それに、ベンチと木はすり抜けたのに、フェンスにはぶつかった。霊なのに。

「瀬戸内浩哉だな？」

二人のうちの一人が、そう言った。サングラスをかけているので、目が窺えない。ゆえに、何を考えているのかがまったく分からない。『ぼくの姿が見えるのか？』

「当たり前だ。……私たちは、あの世の使者だ」

あの世の人間か。ならば、ぼくの姿は見えているし、声も聞こえるはずだ。触れることだって、可能だ。

『ぼくを迎えに来たのか？』

このままあの世に連れて行かれるのだろうか。

しかし、男は首を横に振った。

「違う……」

白い衣が翻る。

「貴様を殺しにきたのだ」

一日目（４）：理不尽な裁き

『えっ……ちよっ……今、なんておっしやいましたか？』

「同じこと二度言うほど、私たちは暇ではない」

……わけがわからない。なんでぼくが殺されなくちゃいけないんだ。しかも、一度死んでいるのに。二度殺そうというのか。

それに――

『仮にあなたがあの世の使者なら、狙いは怜音だろ。それとも、ぼくが彼女の守護霊だから、か？』

「答える必要は無い」

その言葉と同時に、二人の男はぼくに向って走ってきた。殺意全開で。

『くそっ！』

ぼくはすぐさま逃げた。

ぼくのチキン中枢が、これ以上無いくらい警告を発している。

――あの二人は危険だ、と。

ぼくは公園のベンチをすり抜け、木々をすり抜け、フェンスをすり抜けて公園外に逃げようとした。

しかし、またしてもフェンスに激突した。飛び越えようとしても、まるでそこに見えない壁があるかのように、ぼくの体は公園内に弾き戻された。

公園から出られない。

どうなっているんだ？

幽霊なのに。

「死ね……」

感情の無い声。

ぼくは条件反射で身をすくめた。頭上を掠めるように、サーベルのような刃物が走る。

『うわぁ！』

ぼくはあわてて体の向きを変え、再び逃げた。

だが、ぼくの行く手を遮るかのように、目の前に公園の木が倒れ込んだ。倒れた木の向こうには、もう一人の男が立っていた。

『えっ……？』

ぼくは自分の目を疑った。

男の右腕が、剣のような形状をしていた。さっきまで、普通の人間の体をしていたのに。

しかし、ぼくの思考はそこで途切れた。ひやりとした、冷たい感覚と共に。

冷たい感覚の後、灼熱の痛みが込み上げてきた。

転がるように二人の男との距離を開け、体の痛む箇所を触ってみる。

背中が割れていた。おそらく、木の向こうにいた男に氣をとられている隙に、背後からバツサリとやられたのだろう。

血は出ていない。当たり前か、幽霊だから。

しかし、痛みは本物だった。死ぬほど痛い。——いや、もう死んでるけど。

そして、この場の打開策を考える暇も無く、二人の男は再びぼくに向って走り出した。二人とも、剣のような右腕を振りかざして。

今度こそ、死ぬ。あの世からの使者は、ぼくを死へと誘う死神だったのだ。

半ば諦めた。チキン中枢はもう警告音すら鳴らさない。目の前に迫ってくる死がスローモーションのように感じられ、ぼくはゆっくりと目を閉じた。

——パリンッ！

ガラスのコップが割れたような甲高い音が、静寂の中に響き渡っ

た。

ぼくと二人の男は、音のした方を見た。そして、硬直した。

一刹那が、永遠のように感じられた。

「やっと思つたわ」

氷のような、ひやりと、そして凜とした声。長い銀髪が羽のように揺れる。琥珀色の可愛い双眸は、見るもの全てを凍りつかせるような絶対零度の冷たさを帯びていた。

天乃川怜音が、死神よりも死神らしく立っていた。

「公園に結界を張るなんて、小ざかしい真似をしてくれるわ。おかげで、そこにいる家畜を回収するのが遅くなっちゃったじゃない」

『家畜！？』

ぼくを指差す怜音に向けて叫んだが、彼女は何の表情も浮かべなかった。

「それにしても、あの世の使者——それも下級のが二人なんて、わたしもなめられたものね。それでもわたし、あの世の上級裁判官だったのよ。あなたたち格下とはわけが違う」

二人の男は、微塵も動かない。いや、動けないのだろう。年齢も体格も自分たちより下の怜音が、恐ろしすぎて。そう、今の彼女の威圧感は、尋常でなかった。

一歩でも動けば、命を刈り取られるほどの。
ばっさりと。

「浩哉——あなたもわたしをなめすぎよ。家畜は飼い主のもとから逃げちゃだめよ。殺すわよ」

『だから、ぼくは家畜じゃ——』

「家畜を虐める権利も弄ぶ^{もてあそ}権利も^{なぶ}誇る権利も殺す権利も、全部飼い主であるわたしが保持してるの。だから、あなたたち下級の使者がわたしの家畜を殺すなら、わたしはあなたたちを、この世に一片のDNAも残さずに完全消滅させるわ」

『ろくな権利がねえ！』

「間違えた——義務だわ」

『もつと酷い!』

「ていうか、それがわたしの使命よ」

『そんな使命に燃えるなよ!』

「だから——」

怜音は右腕を掲げた。

彼女も右腕を剣に変えるのだろうか。あの世の人たちは全員、そういうことが可能なのか、と思った次の瞬間——彼女の右腕に光が包まれ始めた。

ぼくは思わず目を細めた。光の眩しさにもそうだが、しかし、この光はおかしい。

見ていて、恐怖が全身を駆け巡る光。

光は普通、《希望》とかいうイメージが強いが、この光はその真逆。

《絶望》

見るもの全てを絶望させる、闇より暗い光。まるで、死刑宣告を受ける前のような気分だった。

「地獄で後悔なさい——」

彼女の唇の端が吊り上った。

厭な、笑みだった。

ジャッジメント

「断罪——!」

彼女の右腕が振り下ろされた。

同時に、光の弾丸が超高速で天から降ってくる。いや、降ってくるとぼくの視覚が認識したとき、すでに光の弾丸は地面に激突していた。地球全体を震撼させるような衝撃が、ぼくの体を貫く。

そしてあつという間に、二人の男——あの世の使者たちは光の弾丸に押し潰された。

悲鳴も上げず。為すすべもなく——

一日目(5)：五日間の約束

ぼくは思わず尻餅をついた。

地面が抉れ、土煙が上がる。視界が開けた時には、ぼくの目の前に大きなクレーターが出来ていた。

ぼくの目の前に。

あと一メートル近ければ、ぼくも光に押し潰されていたんじゃないだろうか。

「ちっ」

『何で今、舌打ちした!』

「家畜に教える筋合は無いわ」

『また家畜扱いか!』

「浩哉——」

怜音がどんどん近づいてくる。冷たい目はそのままに。

視線で射すくめられるとは、まさにこのことだろう。一步も動けない。

そして怜音はぼくの前に立ちはだかった。腰が抜けて立てないの
で、思いつき見下されているような感じになる。為すすべの無い
ぼく。

「後ろ——」刃物のような口調で彼女は言った。「後ろ向きなさい。
背中、切られているでしょ」

「へ?」

一瞬、彼女が何を言っているのか理解できなかった。

「さっさとしなさい」

『は……はい』

言われるがまま、ぼくは彼女に背中を向けた。彼女は地面に座り、
ぼくの背中に手のひらを当てた。

温かい。

幽霊になってから初めて知った、人の温もりだった。こういうも

のって、失って初めて大切なものだ気づくんだよなあ。

『って……あれ？』

何かいま、物凄く良い感じじゃないか？ ドライアイスのような
怜音が、ぼくの傷を心配してくれるだなんて。

こ、これは——世にいう《ツンデレ》ってやつなのか！？

初めての感覚だ。

こういう感覚を、も——

「え……痛てえええええええ！」

突如、例えようの無い痛みが全身を駆け巡った。
激痛どころじゃない。マジで死んだかと思った。

「あら、思ったよりまだ大丈夫そうね」

『ぼくは今、死んだかと思ったぞ！』

「それはそうよ。傷口を無理やり広げただから、死にそんな痛み
も当然だわ」

『ぼくは何かの実験材料か！？』

「ええ、あなたの霊力を計らせてもらうために」

霊力を計るために、死ぬような痛みを味あわなくてはいけないと
は……。霊力を数値化できる便利な機械とか、無いのかよ。スカウ
ターとか。

「戦闘力5——ゴミヤムチャね」

『ゴミヤムチャって！？』

「冗談よ」

酷い言われようだった。ご愁傷様、ヤムチャよ。

『それにしても、何でぼくの霊力を計る必要があつたんだよ？』

「霊力が高ければ高いほど、強くて壊れない魂ってことなの。あな
たは常人よりはるかに多い霊力を持っているから、この傷で死なな
かったのよ。常人の霊なら、この傷は致命傷よ」

『だからって……どうして傷口を広げる必要があるんだ？』

「ん、どれくらい痛みを与えれば死ぬかな、と思って」

『殺すつもりだったんかい……』

「肉体が死んでも魂は生きている。だから、生まれ変わりは可能でも、魂が壊れる——つまり霊の状態で死んでしまったら、存在そのものが消えてしまうわ。いくらあなたに大量の霊力があつたとしても、ね」

そして、怜音はぼくの背中を、バシイン！ と引つ叩いた。

今度こそ死んだかと思った。

「治ったわ。さあ、立ちなさい」

『立てるか……』

幽霊なのに痛みを感じるなんて、何だか損な気分だ。

『ていうか、ちゃんと説明しろよ。……あいつら、お前の追っ手なのか？』

「ええ。あいつらは下級の使者。——使者っていうのは、天国、煉獄、地獄を管理する役職で、それぞれ下級、中級、上級の使者がいるの。裁判官も同様に階級があるわ」

『つまりあいつらは、あの世の使者の中でも弱い方なのか』

「ええ。ゴミのようなクズよ」

『ゴミもクズも同じだろ』

「ゴミのようなヤムチャよ」

『ヤムチャさんに今すぐ謝れ！』

酷い言われようだった。哀れ、低級使者たち。そして、ヤムチャ。それに、上級裁判官と下級使者じゃ実力が違いすぎるわ。あの世の連中も、追っ手の人選を誤りすぎね」

『でも、次にまた低級使者がくるとは限らないだろ』

「そうね。今度は絶対に強いのが来る」

『じゃあ、ぼくは用無しだな』

ぼくは怜音に背を向けながら言った。

『低級使者にも殺されかけて。次に上級なんか来たら、ぼくは確実に殺される。それに、^{ジャッジメント}ぼくがいなくても、お前は十二分に強いじゃないか。あの技——断罪^{ジャッジメント}だっけ？』

「そう。あれは、あの世の人間や霊を、あの世に強制送還する技よ。

もつとも、あの技を受けたら三日間は体が動かせないでしょうけど」
酷い技だった。でも、それほど強力な技があるのなら――

『あれの技があれば、守護霊なんて必要ないだろ』

「そうね、必要ないわ」

感傷に浸る隙も無いくらい、高速の返答だった。

同情くらいしてほしかった。

「必要ないわ、まだね」

『まだ？』

ちょうど学校の昼休みの時にも、同じような問答を繰り返したような気がする。その時は深く追求しなかったので、結局答えは聞いていなかったが。

怜音は、はあとため息をついた。

なんかすぐく馬鹿にされた気分になった。

「浩哉、あなたはわたしがあの世の連中から一生逃げ続けなくちゃいけないと思ってるの？」

真夜中の北風のような声だった。怒っているというよりは、呆れているといった方が近い言い方。

「わたしはそんなの嫌。一生逃げ続けるなんて、考えられない」

『じゃあ、ひよつとして……あの世の連中を全員殺す、とか……？』

こいつならやりかねない。

しかし、怜音はまたしてもぼくを馬鹿にするようなため息をついた。

「あなたは今から何も音を立てないで」

『つまり、黙ってる？』

「呼吸音と心音もうるさいわ」

『遠回しに死ねってことか！？』

「うるさい」

一喝された。

「簡単な話、わたしがあの世の人間で、あの世で罪を犯したから逃げなくちゃならないの。だから解決策は至ってシンプル。わたしが

あの世の人間でなくなればいいのよ」

『なにわけの分からないなこと言って——グボオ!』

鮮やかな手刀がぼくの喉に決まった。息が止まる。首がへし折れるかと思った。

容赦のない奴。

「わたしの体はまだ、あの世の人間と同じ様式。それを、この世の人間のものに変える。体の構成を変化させればいいのよ。この世の人間のものに、ね」

色々と言いたいことがあるが、手刀による疼痛が激しいため、声が出なかった。

「五日よ」彼女は手のひらを広げ、ぼくの前に突きつけた。「五日で、この世の人間になってみせる。そうすれば、もう追っ手は来なくなるわ」

たしかに、彼女があのだの世の人間である以上、あの世からの追っ手は来るだろう。

だが、この世の人間になってしまえば、話は違ってくる。それが五日で出来るのかは、彼女次第だろうが。

でも、それではぼくの疑問に答えていない。

ぼくは彼女の守護霊として、必要とされるのだろうか。

「だからあなたは馬鹿なのよ」

思考を読まれた!?

「あなたが、無い脳みそを絞って考えているそぶりを見せたからよ。低脳さがバレバレね」

彼女の言葉は本当に冷たい。ひょっとして氷山の中から生まれてきたんじゃないだろうか。

「この世の人間の体になるってことは、わたしの力は格段に弱くなる。身体能力の低下は勿論、ジャッジメント霊にも触れられなくなるだろうし、見えなくなるかもしれない。《断罪》ジャッジメントも使えなくなる。下級使者にも簡単に殺されるわ」

『あ………』

そうだった。この世の人間になるということは、あの世の人間の能力を全て捨てなくてはならないのだ。

「この世の人間に近づくにつれて、わたしは確実に弱くなる。だから、あの世の追っ手からわたしを護ってくれる守護霊が必要なのだ。彼女の目がぼくの目を真っ直ぐ捉える。逸らすことの出来ない、それはまるで信頼にも近い、純粋な眼差しだった。

「たとえ、わたしがあなたの姿を見ることが出来なくなっても、あなたの声が聞こえなくなっても、あなたはわたしを護るの。それが、あなたの使命だから」

瞬きすらも許されない。

「わたしの体が完全にこの世の人間のものへと変化し終われば、黒丸と白丸があなたの魂を元の体に戻してくれる予定になってる。だから――」

「五日間だけ、わたしを護って」

……懇願された。

思考回路がショート寸前。そして、今ショートした。

怜音が――ぼくをけなし続けてきた怜音が、ぼくに対してお願い事を！？

「やっぱり、なんかム力つくわ」

彼女の踵落としがぼくの脳天に直撃した。自然、腰が折れ、彼女に對して頭を下げているような格好になった。

「これでいいわ。このままずっと、わたしに頭を下げてなさい」

依然としてぼくの頭の上から踵をどけない怜音。しかし、そんな彼女は気づいていない。

そう、少し視線を上げればスカートの中が……。もう少し幸せな気分を味わいたかったので、ぼくは彼女に踏まれるままでいた。

しかし数十秒の後、怜音はぼくの目的に気づいてしまう。
その後のぼくがどうなったかは言うまでもないだろう……

一日目終了

残り四日

一日目（5）：五日間の約束（後書き）

なぜこの小説のサブタイトルは「一日目」なんだろう、という謎がようやく分かりました（すでに気づかれている方もいらっしゃると思いますが……）。

さて、残りはあと四日。浩哉は怜音を護りきれるのでしょうか？
次話以降も読んでいただけたら幸いです。

二日目（１）：背負った覚悟

……もう何時間たっただろうか。

東の地平線では朝の到来を告げる光が燦然さんぜんと輝いている。頭上では小鳥が軽やかに踊りながらさえずり、夜の主役である月は、まもなく舞台裏へ下がるうとしていた。

そんな幻想的な朝の訪れとはおよそ無関係の、小さな空き地に、ぼくと怜音はいた。目の前に五階建てのマンション（ぼくの家だ。ちなみに、501号室）があるため、陽光が遮られて一日中薄暗い。そんな薄暗い空き地に。

ぼくは倒れていた。

『うつ……うつ……』

「泣いている暇があったら立ち上がりなさい」

切れ味のよい日本刀のような怜音の言葉に、ぼくは畏怖の念を感じなら立ち上がった。だが、ぼくが完全に立ち上がる前に、彼女の強烈なハイキックが飛んできた。もはや何度繰り返されてきたか分からない攻撃。いくら学習能力の高くないぼくでも、順応しないはずも無かった。彼女の攻撃パターンは全て把握している！

腰をかがめながらハイキックを避け、鞭のようにしなる彼女の足から一定の距離を保つ。しかし、距離を保ったからといって油断は出来ない。ぼくは次に来るであろう中段突きを予測しながら、体を横に捻った。案の定、彼女の中段突きはぼくの体を掠めて唸りを上げた。

——ここが反撃のチャンスだ！

ぼくは体を捻った反動で、全体重を乗せた回し蹴りを彼女の背中に浴びせようとした。吹き飛べ、天乃川怜音！

「遅い」

回し蹴りが回りきる前に、ぼくは左半身に衝撃を感じた。まるで体の真横から巨大なハンマーに打ちのめされたように、ぼくの体は

一直線に吹き飛んだ。だが、ここで簡単には諦めない。地面に体が接触するまでの数秒でばくは体を翻す。霊体は便利だ。重力をまったく受け付けない。

再び体勢を整え、あたりを見回す。

『……あれ？』

怜音がいない？

さっきまで、そこにいたのに。

と、次の瞬間、ぼくは背後から突き倒された。うつぶせに地面に倒れ込み、後頭部をつかまれて顔を地面に押し付けられる。地面に顔がめり込み、沈む。幽霊だから、地面をすり抜けることも可能なのだ。

しかし――

『れ、怜音さん……』

「何かしら？」

ぼくの後頭部を掴み、地面に押し付けたまま怜音は答えた。

『あの……なぜか息が苦しいんですけど』

「当たり前じゃない。地面の下に霊素れいそはほとんどないから」

『れいそ？』

「大気中に漂っている気体。酸素みたいなもので、霊はこれがないと窒息死するわ」

『幽霊が窒息死なんて聞いたことねえよ……』

死んだ後も死ぬのかよ――。いや、肉体が死んでも魂は残る。ゆえに、生まれ変わりは可能。だが、魂が死んでしまったら何も残らない。それは死ぬというより、消滅に近かった。存在の――消滅。しかし、なるほど。幽霊になって物をすり抜けられることを知ってから、『ひよつとしたら地面を突き抜けてブラジルまで行けんじゃないか』とも思っていたが、これでは無理そうだ。

『いや、っつかさ、怜音。……いいかげんその手を離せよ！』

地面に頭を押し付けられ、四肢をじたばたさせてもがくぼく。このまま地面をすり抜けて逃げようかとも思ったが、彼女の爪が頭に

食い込んでいて逃げようにも逃げられない。

このままでは幽霊初の窒息死だ。

「浩哉、カレーライスとライスカレーってどう違うのかしら？」

「どっちも同じだ！ てか、話を逸らすな！ し——死ぬ！」

ようやく頭にかかる圧力が無くなった。ぼくは溺れかけた人のように、頭をがばりと上げ、大きく息を吸い込んだ。

朝の新鮮な空気が鼻や口から入り込み、体の——霊体の隅々にまで染み渡る。

「でも——だいぶ霊体としての自分に慣れてきたみたいね」

怜音が冷たく言い放つ。まだ呼吸が苦しいため、ぼくは言い返すことが出来ない。

「まずは霊体としての自分に慣れることが重要な。守護霊としての本格的な修行は、それからね。でも、ひとまず、第一段階の修行はクリア。第二段階は、学校から帰ってきたら始めるわよ」

怜音はそう言っ、すたすたと空き地から出て行った。

『ケケケ、調子はどうだ？』黒丸がニヤニヤと笑いながら、ぼくに近づいてきた。『守護霊としての修行は大変だろ』

『まあね。でも、引き受けちゃったからさ、彼女の守護霊役を。覚悟は出来ているよ』

怜音はこれから、徐々にあの世の人間としての能力を失っていく。彼女は五日だと言った。五日で、この世の人間になると言った。

ならば、ぼくはその五日以内、できるだけ速く、彼女をあの世の追っ手から護りきれほど強くならねばならない。

生半可な覚悟で引き受けたわけじゃない。

『そっいえば、怜音は？』

『お前の家に帰ったよ。学校までまだ時間があるから、それまで寝るんじゃないのか』

『そっか』

あの世の人間には生理現象がほとんど無い。食事も睡眠も、もちろん無い。だが、怜音の体は徐々にこの世の人間のものになりつつある。睡眠をとるのも当然だ。ましてや、この第一段階の修行は、昨日の夜中からずっとやっていたのだ。疲れないはずが無い。

ただ、もうそろそろぼくの両親が起きる頃なので、見つからなければいいが。まあ、怜音なら心配要らないか。

『じゃあ学校行く時間になったら起こしに行くか。ぼくはそれまでぶらぶらしてるよ』

『ああ……』

ぼくは空き地から離れようとした。幽霊だからなのか知らないが、あまり疲れは無い。痛みもすぐになくなる。ぼくは久々に朝の町を散歩でもしようかと思った。

その時、見慣れた人影が目の前を通り過ぎた。あまりにも速くて一瞬しか見えなかったが、見間違えるはずはない。なぜなら、そいつはぼく自身。《瀬戸内浩哉》こと白丸だったからだ。

『白丸!』

呼び止めると、白丸はくるりと体をこちらに向けた。

「あ、浩哉さん。おはようございます」

『……お前、何やってるの?』

「見て分かりませんか? ジョギングですよ。ジョギング」

たしかに、白丸はぼくのジャージを着ている。額には爽やかな汗が滲んでいた。

「浩哉さん、運動不足ですよ。この体、かなりなまってます。だから、私が鍛えて差し上げようと思って——」

そう言うやいなや、白丸はバック転をしながらぼくに向ってきた。軽やかに、まるでプロの新体操選手みたいに飛び、ぼくのちょうど目の前に着地した。

「どうですか?」

白丸はにっこりと笑った。得意満面ってかんじ。

……あまりの驚きに声が出ない。運動オンのぼくの体で、よく

そんなことが出来るものだ。体は同じでも中身が違つと、こんなにも違うものなのかなあ。

「では、学校に行く時間になるまで走つてきます」

『お、おう……』

ぼくが返事をする前に、白丸はすでに走り去っていた。その後姿はみるみるうちに遠ざかり、気づいた時には既に見えなくなっていた。

『……ぼくも散歩に行こう』

あんな凄いことを見せ付けられて調子が狂つたが、ぼくは本来の目的を思い出した。いざ、散歩に行かん。

『おい！』

直後、背後から黒丸に呼び止められた。

……つたく、この犬どもは。

『どうした？』

『あ、いや……』

妙に煮え切らない様子の黒丸。目が眼窩の中で微妙に泳いでいた。

『や、やっぱ——なんでもない』

明らかに様子がおかしかったが、ぼくはたいして何も考えずに『そうか』と言つて、朝の町に繰り出した。

この時のぼくは、まだ何も気づいていなかった。

怜音を護りきるといふことしか、頭の中に無かった。

それがどれほど重い意味を持っているのかも知らずに――

二日目(2)：想い出の場所

学校にいる間、怜音の様子は昨日とまるで変わらなかった。最強の転校生として、いつの間にかクラスで不動の地位を確立している。今日も昼休みは京介と梨恵と一緒に弁当を食べた。怜音は笑いこそしなかったが、すごく心地よさそうな表情をしていたような気がした。

そして放課後――

『怜音、今日はどんな修行なんだ？』

今朝の修行がすごくハードなもので、ぼくは次の気がかりでしうがなかった。せめて、心の準備だけでもしたいものだ。しかし、彼女は鬱陶しそうに手をひらひらと振った。「話しかけるな」という意味だろう。なんか少し腹が立った。

その時、ぼくの背後から黒丸が話しかけた。眉間にしわを寄せている。本当に人間らしい犬だな。感情豊かだ。

『こんな人の多いところでご主人に話しかけるな。お前の声はご主人にしか聞こえないんだからな』

――そうだった。

ぼくの姿や声は、怜音にしか見えないし聞こえない。ぼくと話しているところを他の人に見られると、彼女は確実に、『怪しい人』扱いされる。だって、独り言を喋っているようにしか見えないもの。「怜音！」

元気の塊のような声がぼくたちの後ろから飛んできた。振り返ると、和泉梨恵と岸京介が並んでこちらに歩いてきた。京介は身長が180センチあり、梨恵はその点150センチ弱のため、かなり凸凹なコンビだ。

声の主である梨恵が怜音に言った。

「ねえ、怜音ってこれからヒマ？」

昨日初めて会ったばかりの怜音に、梨恵はもう下の名前で（しかも呼び捨てで）呼んでいる。相変わらず、人見知りしないやつだ。

「別にこれといって用事はないけど……」

梨恵の勢いに押されたのか、怜音はそう答えた。……ぼくの修行があるだろうに。

「そっか！」梨恵の顔がぱつと輝いた。「じゃあ、転校したての怜音に、あたしたちがこの町の見所を紹介したげる。一種の社会見学ね」

「たち」ということは、もちろん京介や白丸（外見は《ぼく》と瀬戸内浩哉）も含まれているのだろう。梨恵の後ろで京介が苦笑いをしていた。白丸はきょとんとしている。何だか話の展開に追いつけていないようだ。

「じゃあ、レッツゴー！」

梨恵が楽しそうに笑った。

ぼくの住んでいる町は都心から少し離れた場所にある住宅地だ。俗にいうベッドタウン。閑静で小さな町のように見えるが、しかし、駅前に商店街があるので昼間でも町は活気に溢れていた。……おばちゃんたちの。

そして、その赤い煉瓦で舗装された道の商店街を、梨恵は所狭しと動き回っていた。

「ここラーメン屋は醤油ラーメンが最高なの。で、あっちのパン屋さんのメロンパンは、並みのメロンパンとは格が違うわ。隣のアイスクリーム屋さんのアイスは冬に食べてもいいけるし、向こうのカフェは女子生徒たちに人気よ」

何だか食べ物に関するネタばかりだ。さっきから梨恵はこんな調子で、怜音と京介、そして白丸を連れ回している。

それにしても、梨恵の食欲には恐れ入る。食べても食べても太ら

ない梨恵の体質は、肥満型の人から見たら、さぞかし羨ましいだろう。

「梨恵」京介が肩をすくめた。「もうそろそろ時間だぞ」

その時、まるでタイミングを計ったかのように、五時を知らせる鐘の音が商店街に響き渡った。見上げると太陽はもう沈みかけおり、空がオレンジ色から薄い紺色へ、鮮やかなグラデーションを演出していた。

そういえば、もう秋なんだな。

梨恵はぶうと頬を膨らませたが、「わかったわ」と言った。
「最後にあの場所に行こう！」

商店街から離れ、住宅街を抜けること十数分、ぼくたちは道路沿いにある小さな山の麓^{ふもと}にやって来た。隣の区とまたがつているこの小さな山は《井出山》という名前であり、通称《灯籠山^{とうろうさん}》。

「この山はね、いわくつきなんだよ」山の頂上へ向う階段——らしいところを登りながら、梨恵が怜音に言った。

「この山はね、《灯籠山》って呼ばれてるの。なんで《灯籠》かっていうとね。……出るんだって、幽霊が。でも幽霊っていうか、火の玉みたいな形をしているらしいんだけどね。それが灯籠の明かりに似ているから、《灯籠山》。まあ、あくまでも噂だけだね」

梨恵はいたずらっぽく笑んだが、ぼくは少し身震いを覚えた。

実際、ぼくはこの山で幾度と無く幽霊を見ている。特に、霊感が戻りつつあるここ一ヶ月の間。

ぼくの家の窓からでも、夜になると、この山の上で飛び交う無数の火の玉が十分に観測できる。だから、梨恵の言っていることは本当のことだ。……しかし、幽霊であるぼくが幽霊を怖がるのも変な話だな。

怜音は梨恵の話に「そうなの」と相槌を打っただけで、あとは何も喋らなかった。足場の悪い階段を、梨恵のあとを追って難なく登

る。

先頭に行く京介がたびたび後ろを振り返っていたが、全員が苦も無く付いてきているのを見て安心したのか、後ろにいる白丸に話しかけた。

「浩哉、天乃川ってやっぱりお前の彼女なのか？」

「それは前にも申し上げましたが——彼女は私の主人です。そして私は彼女の従者。私とご主人様は、彼氏彼女の関係では決してありません」

断固とした口調だった。

京介は少し黙り、それからまた口を開いた。

「それにしても、彼女ってアレっぽいよな」

「アレ？」

「そう、アレ。——今流行っている、ツ……ツ……」

「ツ？」

「そうだ、ツンドレ！」

おい、京介。

それをいうなら《ツンデレ》だろ。間違えるならせめて《ツンドラ》で間違えるよ。しかも、ツンデレって流行っているのか？

いや、それに怜音は本当にツンデレなのか？ ……デレてるところなんぞ、今まで一度も見たことないぞ。これじゃ《ツンツン》だ。

「京介」白丸が首をかしげた。「それをいうなら、アンドレじゃありませんか？」

『《アンドレ》って外国人の名前だろ！』

ちなみに《どれ》っていうのは、だらしないこと、酔っ払うことって意味がある。一文字違うだけでこんなにも意味が違ってくるんだな。

《ツンドレ》：普段はツンとすげない態度をとるが、一定の条件下ではだらしく酔っ払うこと。

……新たなブームが到来する予感はいなかった。

山の頂上に着いたときには、夜空を無数の星が瞬いていた。太陽はお役御免。月と星が織り成す幻想的な夜へようこそ。

『……やっぱり』

太陽が完全に沈んでから、この山に無数の火の玉が集まってきた。無数の星と無数の火の玉。幻想的というよりかは、摩訶不思議世界だ。もちろん、この火の玉が見えるのは、ぼくや怜音、それと白丸黒丸だけで、梨恵と京介には見えない。

山の頂上は平らになっており、広さはバスケットボールのコートひとつ分くらい。地面は所々に苔の生えた石畳に覆われている。鬱蒼と木の茂ったこの山から、ぼっかりと切り離された場所のようだった。

「しかし……ここって何も無いじゃねえか。最後に案内するには、少し物足りないかもな」

京介が揶揄するように梨恵に言った。

梨恵はまたしても頬を膨らました。怒っているらしい。

「でも、ここはあたしたちにとっての『想い出の場所』だよ。だって、浩哉の彼女さんの怜音にも見せてあげなくちゃ」

だから彼女じゃねえよ。

ご丁寧にも白丸が訂正しようと口を開きかけたが、

「ここって——」という怜音の発言によって、それは阻まれた。

「三人にとって、どういった『想い出の場所』なの？」

ごく普通の、友達同士でするような会話の口調だった。表情こそは変わらないが、怜音独特の冷たさを孕んだ口調ではなかった。それがぼくには、妙に新鮮に感じられた。微笑ましくも思った。

もう、怜音はぼくらの仲間なんだな。

「ここはね、あたしたちが初めて会った場所なんだ」梨恵は楽しそうにそう言った。

二日目(3)：感傷と独白

「この山って、幽霊の噂があるからあんまり人が来ないんだよね。だから、逆に格好の遊び場所だったんだ。公園より人が少ないし、頂上からの眺めは綺麗だし」

「だから、俺と梨恵はよくここに来て遊んでいた。そうしたらある日、ここに浩哉が一人でポツーン、って立っていたんだ」

梨恵の後を引き継いで京介が言った。

「でも、こいつビビッて逃げやがってさ。でも、すぐにこけたけどな……たしか、小学校に入る前だったな」

くはは、と京介は笑った。

——たく、笑うな。恥ずかしくて顔が熱くなるじゃねえか。

顔の熱い幽霊なんて気持悪いが。

「で、気づいたら仲良くなっていたわけ。それ以降、いつも三人一緒さ」

思い出したらきりが無い思い出。色褪せず、無くならない。そう、それは幽霊になっても変わらなかった。体は無くても、心はあるってことか。

「でも、浩哉っていつもドンくさくってさあ——ねえ怜音、聞いてよ。浩哉のやつ、高二にもなってまだ泳げないんだよ。一ヶ月前にみんなでキャンプに行ったときね、浩哉ったら川に溺れちゃったのよ」

梨恵が喜色満面の笑みを浮かべた。

傍から見ると非常に可愛いのだが、人の恥を本人がいる前(中身は白丸だが)で平気で晒す彼女が悪魔に見えてきた。

「夏休みの終わりに、みんなで河原の近くにキャンプに行ったんだよ——」

京介が梨恵の後を引き継ぐ。この会話のスタイルは小学校の時から変化していない。梨恵の説明不足の点を京介がいつも補っている

のだ。

「浩哉が溺れた時はマジで焦ったよ。あっという間に流されちゃって……浅瀬で見つけたときには、ホント胸を撫で下ろしたさ」

「まあ、それが浩哉らしいけどね」

あはは、と笑って梨恵がそう締めくくった。

「そうなの……」

怜音は小さく頷いた。

まるでこの場所だけ、優しくて温かいものに包まれているようだった。それは微笑ましい思い出。みんなの笑顔。

眼下には暗闇に沈んだ夜の町。水底のようにも見えるそれは、月や星の明かりを反射して、ぼくたちのいる場所を照らしている。微笑みのような光。

ぼくらはしばらくの間、この風景を眺めていた。彼らと出会った時と変わらない、そしてこれからも変わることのないこの風景を。今も変わらぬ友情を誓った友人たちと共に――。

街灯の白い光が怜音と白丸を照らし、影がすうと伸びる。怜音の髪を揺らす冷たい風が、季節がもうすっかり秋になったことを告げていた。

「ねえ――」

怜音は不意にぼくの方を見た。ぼくはさつとあたりを見回した。

京介と梨恵とはもう別れたので、これはぼくに話しかけているのだろつ。

『なんだ？』

「仲、良いのね」

ぼくと京介と梨恵のことか。

『そうだな。小学校の時からずっと一緒だったから。……腐れ縁つてやつだ』

幼い頃を思い返す。止め処なく溢れ出る思い出を手のひらで掬^{すく}つ。

それらは昔と変わらず、今も輝いていた。

『ぼくつてさ、保育園のとき友達が一人もいなかったんだ。だから、あいつらと仲良くなれた時、すごく嬉しかった。ぼくの——初めてできた友達だからな』

半ば独白だった。

鮮明に残っている記憶。本当に大切なものは朽ちることはない、と納得できる瞬間。

だが、ぼくの思考は急速に現実に取り戻された。今までふわふわと宇宙空間を漂っていたのに、突如現れたブラックホールに吸い込まれたような気分。酔いが覚めた心地。

他ならぬ、怜音のその表情によって。

『怜音——』

普段は澄んだ琥珀色の目が、今は深海のように暗澹あんたんとしている。美しい銀色の髪には、影が差しているようだった。

『どうしたんだよ、怜音』

返事はない。沈黙を保ちながら、機械のように家に向けて歩を進めている。黒丸も白丸も、何も言わない。ぼくは沈黙に押し潰されそうだった。耐え切れない。

『れ——』

「すっかり遅くなっちゃったわ」

ふと、怜音はそう言った。何の感慨も無く。冷淡で平坦な怜音の口調。

「修行の遅れた分は、きっちり取り戻すわよ。浩哉、覚悟はいいかしら？」

ぼくが文句を言えるはずもなかった。

それにしても、怜音のあの表情は何だったのだろうか。黒丸と白丸も、様子が変だった。いつからだろうか。ぼくは、彼女らの気分を害してしまったのだろうか。

考え事は尽きず、修行にもあまり身が入らなかった。怜音の罵詈雑言も、半ば夢見心地で聞き流した。

しばらくして、怜音が深いため息をついた。

「駄目ね」

副音声で「死ね」と聞こえたような気がした。

「五分間、休憩を取るわ。その間に頭を冷やしといて頂戴」

氷水を思わせるような言葉を放つと、怜音はすたすたと歩いて空き地から姿を消した。

静寂が舞い降りた。

白丸はとくに寝ており（「この世の人間の体は不便ですね。きつちり睡眠を取らないと、疲れが取れません」）、黒丸はさっきから所在無さげにふらふらと、波に揺れる海草のように漂っていた。

修行が始まってから数時間。マンシヨンの陰に隠れたこの空き地には、月明かりさえも満足に入ってこない。道にある小さな街灯の光が唯一、この闇を緩和しているように思えた。さながら小さな灯台のように。

『いま何時だ？』

時間がさっぱり分からなかったので、ぼくは黒丸に聞いた。

『……もうすぐ三時だな』気の無い返事。

『怜音のやつ、遅くないか？』

怜音が去ってから、既に五分以上経っていた。

黒丸はやはり気の無い感じで、『心配なら探しに行きゃいいじゃないか』と言った。

——たしかに、少し心配だった。

暗闇の中に沈んだような怜音の表情。それを思い出すたびに、ぼくの心のどこかで誰かが警鐘を打つのだ。『何をやっているんだ、急げ！』と。まるで、怜音がぼくの前からいなくなってしまうような気がした。根拠は、まるで無いけど。

『……そうだな』

心臓の鼓動は、知らぬ間に速くなっていた。

二日目（４）：儂く脆い心

空き地に面した小さな道を少し行くと、少し大きな公園がある。

こちらは周りに遮蔽物が何も無いので、月明かりを全面に受けてその姿が浮き彫りになっていた。人が三人くらい座れるベンチ。二つのブランコ。なぜか砂場だけは大浴場並みに大きかった。

ブランコと砂場の間に小さな水汲み場があった。蛇口を捻ると水が流れ落ち、すぐに下の排水溝へ吸い込まれていく。主だった使用用途は水分補給ではなくて、子供たちが作る砂のアート用だろう。砂を水で固めて、思い思いの作品を作り上げる。ぼくも昔、よくやったものだ。

だが、今は草木も眠る丑三つ時。子供の姿は、当たり前だが見当たらない。

ただ一人、怜音を除けば。

怜音は水汲み場のところにかがみ込んでいた。じっと排水溝を見つめるように。ぼくには気づいていないようだ。

しかし次の瞬間、彼女は苦渋に満ちた表情を浮かべた。

そして、嘔吐した。

苦しそくに胸を押さえ、込み上げてくるものを吐き出す。吐瀉物としゃぶつ

は排水溝に吸い込まれて消えていくが、彼女の吐き気は治まらなかった。既に胃の中のものを出しつくし、今は胃液しか出ていない。

それでも彼女は辛そうに吐いた。その背中は一瞬に震え、まるで泣いているように見えた。

ぼくには、なにが何だか分からなかった。

あの気丈な怜音が、あんなに苦しそうな姿を見せるなんて、誰が想像できるのだろうか。

胸が疼く。うず先ほど感じていた不安が心の中で膨れ上がり、破裂しそうだ。声をかけたい衝動が突き上げてくる。

『おい——』

小声が後ろから聞こえ、ぼくは振り返った。

黒丸がいた。『ついて来い』と目で言っている。ぼくは、まだ苦しそうに俯いている怜音を見てから、黒丸の後を追った。

『……お前も見えたか』

空き地に戻つてすぐに、黒丸は言った。さっきの怜音と同じように、苦しそうな表情を浮かべて。

『ご主人はプライドが高い。お前にだけは、あんな姿、見せたくなかったんだな』

『怜音はどうして——』

『お前は何も知らないからな』

ぼくの言葉を遮るように、黒丸は言った。そこで、初めてぼくと黒丸の視線がぶつかり合った。

彼は怒っていた。

他でもない、ぼくに。

『あの世の人間が、この世の人間になるってことは簡単じゃねえ。体の構造をまるごと変えるんだ。それを、ご主人は五日でやってのけようとしている。ご主人の体には、俺らが想像も出来ないくらいの負担がかかっている。……実際、相当辛いはずだ』

ぼくは知らなかった。

彼女が「五日だ」と言ったら、五日で出来るのだと思っていた。

彼女に不可能は無いと思っていた。

……いつの間にか、ぼくは彼女のことを分かっている気がしていたのだ。まだ出会ってから日は浅いが、ぼくは「彼女を護る」という驕りゆえか、彼女のことを自分勝手に理解していた。人の心の奥深さ、奥ゆかしさも知らずに。あたかも彼女のことを知っているようなふりをして。人の心は、そんな単純なものではないのに。

黒丸は知っていた。彼女が辛い思いをすることを。しかし、彼も苦しんでいる。知っていながら何も出来ない、自分自身に。

『あの人は強いが、脆い。俺たち守護霊は、あの人の強さも脆さも、支えなくちゃならねえんだ。お前に——お前なんかにはそれが出来るのかよ』

最後は非難するような口調だった。

ぼくは即答できなかった。ぼくの中に重たい石が投じられ、それがぼくの心にヒビを入れた。そして、そこから大切な何かが零れ落ちていく。ばたばた、ばたばた、と。

『ぼくは——』

言葉が途切れる。その後が出てこなかった。

——もう既に、全て零れ落ちてしまったのだ。心の中に満ちていた覚悟は、それ程しか無かったのだ。

ぼくは今朝のことを思い出した。昨日の晩から今日の明け方まで、怜音はぼくの修行に付きっ切りだった。それなのに、彼女は学校にいる間も、京介と梨恵に誘われて町の見学をしている間も、嫌な顔ひとつしなかった。

そして、ついさっきまでも、彼女はぼくの修行の面倒を見ていた。弱音も吐かずに。疲れも見せずに。気丈を保ち。あくまでも怜音らしく。

——胸が苦しい。熱いものが胸の奥から込み上がってくる。ぼくは俯き、地面を見つめた。自分の無知さを嫌悪し、それでも何も出来ない無力さを噛み締め、闇に染まった地面を見つめ続けていた。

「——何をしているの」

凜と澄み渡る声。ぼくが頭を上げると、そこには天乃川怜音が立っていた。

「頭は冷えた？　じゃあ、修行を続けるわよ」

——あくまでも怜音らしく。その背中に冷光さえ携えて。弱さは、一切見せない。

それが、脆く儚げだった。触れたら壊れてしまいそうな脆さ。研

ぎ澄まさっているが、ひどく不安定な心。

「どうしたの？」

彼女が振り返る。腰までとどく長い銀髪が、羽のようにふわりと舞った。

「早く始めるわよ。時間も無いし」

『……ああ』

今、ぼくは決めた。

生半可で中途半端な覚悟はいらない。

ぼくは全身全霊で君の守護霊になろう。

そして、君を護り抜く。

心に入ったヒビは、もう消えていた――

二日目終了

残り三日

二日目(4)：儂く脆い心(後書き)

二日目終了です。最後の方は、今までの話よりかなりシリアスでしたが、これからはそういった話が増えていきます。

さて、残るは三日。物語は後半へ入ります。

しかし、三日間何も起こらないわけがありませんw
これからの浩哉と怜音の活躍にご期待ください。

三目(1)：避けられない戦い(前書き)

物語は後半へ入ります。

三日目（１）：避けられない戦い

季節は十月に入った。冷たい風が教室の窓を叩き、木の葉を散らす。空は無限に思えるほど高く、白い雲は群を成して悠々と飛んでいた。澄み渡った秋空は、人の心とは正反対だ。虚しいくらい余裕がある。

学校の授業中、ぼくは教室の窓から外の景色を見ていた。他の生徒たちは、先生が黒板に書いた英語の和訳を必死にノートに写している。……あの先生、書くの速いんだよな。

でも、ぼくはただひたすら外を見るばかりで、授業はこれっぽっちも聞いていなかった。今のぼくは幽霊なので、普通の人には見えないから注意はされないが、授業を聞くことくらいはできる。しかし、ぼくにそんな余裕は無かった。

それはぼくが、あの世の人間である、天乃川怜音の守護霊だからだ。

怜音はあの世で罪を犯したらしい。だからこの世に逃げてきて、追っ手から逃れるためにぼくを《守護霊》にした（いわば、ぼくは彼女の《盾》だ）。ちなみに、彼女があの世でどういった罪を犯したかは知らない。

そして、ぼくが怜音の守護霊になって、今日で三日目。予定ではあと二日で怜音の体は“この世の人間”のものになる。そうすれば、あの世からの追っ手は来なくなり、ぼくは彼女の守護霊ではなくなる。つまり、元の体に戻れるというわけだ（今現在ぼくの体には、白丸という言語の喋れる犬の霊が入っている。ちなみに、メス）。

追っ手はいつ来るか分からない。一昨日は二人、昨日は一人も来なかった。それはラッキーなことだが、同時に不安が込み上げてきた。

——もしかしたら、今度は大人数で来るかも。

嵐の前の静けさ、ってやつだ。だからぼくは、常に警戒を怠らないようにしている……が、さすがに少し疲れてきた。こんなにも絶えず神経を張り詰めることは、今まで生きてきた中で無かったことだからだ。

ぼくはやがて外を見るのに飽き、教室の中を見回した。そして、教室の中で絶えず動き回っている黒い何かを見つけた。……黒丸だ。ぼくと同じく怜音の守護霊である黒丸（こいつも白丸同様に犬の霊。ちなみに、オス）は、教室中を飛び回っていた。元氣すぎ。

『黒丸』ぼくは飛び回る黒丸を捕まえて話しかけた。『何やってるんだ？』

『一種のストレス発散だ。最近、暴れてねえから、少し溜まってんだよ』

『……お前、能天気そうに見えてもストレス溜まるんだな』

『俺は悩み多き男だからな』

『お前はまず、自分の頭の悪さを悩め』

皮肉に気づいてねえのかよ。

『ところで……』しょうがないので、ぼくは話題を変えた。『怜音の追っ手、昨日は来なかったな』

『なんだ、来てほしいのか？』

『んなわけないだろ』

できれば残り三日、誰一人として来ないでほしい。

『もしかしたら、このまま逃れられるかな……』って』

『そりゃ無理だな』

黒丸はにやりと笑った。笑ったせいで、顔の面積の半分近くが口になる。剥き出しの鋭い歯並びは、海の狩人である鮫を髭髯させた。黒丸は舌を出し、自分の歯の表面を舐めた。

『——噂をすれば、だ』

パリッ――

静電気が弾けたような音が聞こえた。かすかだが、確実に瞬間、体を“悪寒”という名の電流が駆け巡った。チキン中樞、シグナルイエロー。そしてまもなく、赤にチェンジ。

怜音と白丸も異変に気づいたようだった。二人とも板書をやめ、顔を上げた。近づいてくる何かに反応して。

その時、怜音が椅子を蹴り倒して立ち上がった。

「みんな伏せて！」

クラス中の視線が、怜音一人に集中した。先生も生徒たちも、きょとんとした表情をしている。

「天乃川さん、一体何です――」

先生が言い終わる前に、

教室全ての窓ガラスが、木っ端微塵に砕け散った。

生徒たちの悲鳴が学校内に響き渡った。直後、決壊したダムのように生徒たちが次々と教室から逃げていく。定期的に行われていた避難訓練の甲斐も虚しく、さながら伝染病のように混乱はフロア全体に広がっていた。

現在、教室に残っているのは怜音と白丸、そして京介と梨恵のみ。

怜音は眉間に皺を寄せて、壊れた窓の外を眺めていた。

「浩哉、岸くんと梨恵を連れて避難しなさい」

怜音の言葉に頷くと、白丸は京介と梨恵を連れて教室から出て行った。

『怜音――』

「学校に乗り込んでくるとは、意外だったわ」

怜音はにやりと顔をゆがめ、窓の外れた窓枠に足をかけた。

「でも、冗談にしてはちょっとやりすぎね」

そう言うやいなや、怜音は窓の向こうへ飛び降りた。三階の高さから、校庭へと。

『怜音！』

だが、彼女はわけもなく地面に着地した。ひらりと、その着地はまるで重力というものを感じさせなかった。

校庭には避難してきた生徒が数人、ちらほらと見えた。事態の混乱に右往左往しているの、怜音が飛び降りたことには誰一人気づいていないようだった。

そして、校庭の真ん中、一際目立つ場所に人が五人。おそらく、あの世からの使者である者たちが立っていた。

「真っ昼間から堂々と……。中級使者が三人に、上級使者が二人――か。なかなか人数を揃えてきたわね」

怜音は周りを見回しながら納得したように頷いた。

「――今、わたしは動けないわ。周りの目がありすぎる」

たしかに、避難してきた生徒の数は今も増え続けている。

あの世からの使者たちは、この世の人間には見えないが、怜音は別だ。彼女がここで“断罪”^{ジャッジメント}でも撃とうものなら、この場にいる全員の注目を引いてしまい、彼女はもう一生、この世で暮らしてはいけなくなるだろう。

『じゃあ、どうするんだ？』

「どうするもこうするも、あなただけで戦うしかないわ」

『えっ？』

「大丈夫。赤い糸からわたしの力を送るから。それに、今回は黒丸も戦いに加わってくれるわ」

『マジかよ！？』

「マジよ」

彼女は何の感慨もなく言い放つと、避難してきた京介や梨恵たちと合流した。

取り残されたばかりと黒丸。目の前には敵さんが五人。

『久しぶりに暴れられるぜえ』

黒丸の呟きに、ぼくは寒気を覚えた。口のわきの肉はめくれて垂れ下がり、白い鋭利な歯がのぞいている。真っ赤な舌が、歯の間か

ら炎のようにちらちらと見えた。

敵が警戒しているのが分かる。緊張が空気を伝い、肌を痺れさせる。

ぼくは乱れる意識を集中させ、今朝の修行を思い出した。

——霊体というものは、肉体と違って、ある程度まで変形可能らしい。だから、修行を積みれば自分の体の一部を自分の思い通りに変形出来るという。それはあの世の人間と霊の有する、特殊な能力だ。ぼくは今朝の修行どおり、右腕に力を集中させた。途端に右腕がその原型を失い、溶けたかと思った矢先、細長い棒状のようになった。変化が完全に終わった時、ぼくの右腕はどこからどうみても日本刀そのものとなっていた。

どうやら、あの苦しい修行をした甲斐があつたようだ。

『さて……腹あ括るしかないか！』

無理やり自分自身に喝を入れ、鳴り響くチキン中枢を強制停止させ、ぼくは敵と向かい合った。

三日目（2）：剣閃舞い乱れる

黒丸は荒々しく吼え、敵に突撃した。敵が避けて半分に分散すると、黒丸は片方のグループを壁に追い立てるように体の向きを変えた。

なるほど。残り半分はぼくのノルマというわけか。

ぼくは改めて敵を見た。黒丸が半分に分けたため、ぼくの担当は二人だけだ。

忌々しいほどの白い天使のコスプレに、威圧的な黒いサングラスの二人組。よく見てみると片方は男で、もう片方は女らしかった。女の方は髪が長い。

横目で見ると、黒丸の方は既に戦闘が始まっているらしかった。

黒丸の咆哮が地を震わす。

ぼくは意を決し、日本刀の形状になっている右腕を構えた。

まずは手前にいる男の方に斬りかかった。地面を飛ぶように蹴り、右袈裟に腕を振り切る。しかし、全体重を込めた一撃は空を切った。男は半身を逸らし、鉈なたのような形状をした右足を蹴り上げてくる。ぼくはその蹴りを軽くかわすと、隙のできた男に一撃を与えようと振りかぶった。

しかしその瞬間、視界が光に包まれた。

咄嗟に、ぼくは地面を転がるようにして二人から距離をとった。

一刹那後、一筋の光が頭上を掠めた。

——光の矢だった。

矢は宇宙を駆け巡る彗星のように光の尾を引き、目の前に鮮やかな残像を残した。それは女が撃ったものだった。

だが、見とれている暇は無い。間髪入れず鉈の舞が飛んでくる。それらを右腕でいなすが、またも飛んできた光の矢に体勢を崩され

た。

『クソッ！』

このコンビ、強い。接近戦の鉈に、遠距離戦の矢。……黒丸のヤツ、敵の分け方間違えてんじゃねえか。

その時――

考え事をしていて気が緩み、迫ってくる光の矢に気づかなかった。慌てて右腕を胸元に持つてくる。光の矢を、全身で受け止める。

正面から大砲の弾を受けたような衝撃が体中を走った。右腕が痺れ、日本刀の形状が崩れる。そこへ間断なく鉈が襲い掛かった。

刹那、マグマのような灼熱が全身を貫いた。

しかし、それは痛みではなく、漲る力。^{みなぎ}燃え滾る生命のエネルギーが首から流れ込んでくる。

赤い糸を伝って。

『サンキュ！ 怜音！』

激しい力の奔流が首から全身へ伝わる。流れ落ちる滝の音を体の中から聞きながら、ぼくは振りかざされた鉈を左腕で弾いた。男が怯んだ隙に、日本刀の形状を取り戻した右腕で右袈裟に切り裂く。

そして同時に飛んできた光の矢を弾き落とし、女まで一気に距離を詰め、今度は左袈裟に切り上げた。

あの世からの使者は声も上げずに倒れた。一瞬の出来事だったのだ、おそらく何が起こったかすら気づいていないだろう。

ぼくは倒れた二人を眺め、ほうと息をついた。高まっていた動悸も、今は少しだけ落ち着いていた。幽霊でも、激しい運動は辛いものだ。ぼくは顔を上げ、黒丸の方を見た。

彼はまだ戦っていた。しかし、残っている敵は一人だけ。あとの二人は既に倒されている。

『終わりだ！』

黒丸が高らかに吼え、宙に飛び上がった。鋭い爪を立て、敵に襲い掛かる。そして為すすべも無く、敵は黒丸によって押し潰されてしまった。

黒丸はしたり顔で、ぼくを見た。久々に暴れられて、相当嬉しかったようだ。

『まあ、なんかぼくらの勝ちっぱいね』

ぼくは振り返って怜音を見た。彼女は相変わらずにこりとも笑わず、「勝つのが当たり前でしょ」とでも言いたそうな顔をしていた。……それでも、その表情はいつもより穏やかだったと思う。

三日目終了

残り二日

四日目（１）：あの世からの転校生

今日でぼくが天乃川怜音の守護霊になってから四日目。予定では明日、怜音の体があの子の世の人間のものからこの世の人間のものになる。そうすれば怜音は自由の身となり、ぼくもはれて彼女の守護霊という役目から解放されるのだ。

「浩哉、聞いたか？ また転校生が来るらしいぜ」

そんなぼくの苦勞などつゆほども知らない京介は、瀬戸内浩哉と白丸に話しかけた。

昨日の教室破壊事件（厳密に言うと、破壊されたのは窓だけだったが）のおかげで、ぼくらのクラスは特別教室で授業をすることになった。今朝はその話題で持ちきりだと思ったのだが――。

「転校生……ですか？」

「おお。天乃川が来てから間もないのにな」

そういえば、どことなくクラス全体が色めき立っているような気がする。まだ記憶に新しい天乃川現象のおかげで、転校生というものが既に神格化されつつあるようだ。

……ああ、可哀想な転校生。これでみんなの期待はずれだったら、クラス中が重たい空気に包まれてしまっただろう。転校生には何の罪もないのに。

いつも通りチャイムが鳴ると先生が教室に入ってきた。教室中の視線が教壇の前に立っている先生に集中する。初老の、前髪が少し禿げ上がった先生は、皆の視線に少し動じながら、「今日は転校生が来ます」と告げた。

クラスが祭りのように盛り上がる中、廊下に面した教室の扉が開

き、一人の女の子が入ってきた。

女の子はクラスの盛り上がりように少しも動じていなかった。
栗色のショートカットを撫でつけ、どんぐりのような大きな翡翠の目で教室内をぐるりと見回すと、彼女はにこりと爽やかに笑った。
少年のような笑みだった。

怜音がエレガント系の転校生だとすると、こちらはボーイッシュ系の転校生だ。

「ボクは六連星奏風むつらほしソフイーつていいいます。よろしく」

なんか男子たちが異様な盛り上がりを見せた。
それにしても――

『六連星奏風……ねえ。なんか変わった名前だな』

そう言った矢先、彼女がこちらを見て微笑んだ。……いや、たま
たまだろつ。一般人にぼくの姿が見えるはずが無い。

六連星は教室の隅にある、余っていた机を使うことになった。ち
ようど怜音の隣だ。彼女は怜音の隣まで来ると、にこりと微笑んだ。
「よろしく」

怜音は彼女を一瞥すると、不愉快そうに呟いた。

「……あなた、何しに来たの？」

六連星は人差し指を立て、口に当てた。「静かに」という意味だ
ろつ。

「次の休み時間、空いてる？」

「久しぶりだね、レイン」セイファート」

「……その名前、何だか久しぶりね」

休み時間、校舎の屋上で六連星は怜音に話しかけた。ぼくを除き、
人はその二人しかいない。まだ昼休みではないため、生徒の話し声
はあまり聞こえてこない。

『怜音、知り合い？』

「ええ」怜音はかなり面倒くさそうに言った。「紹介するわ、わた

しの友達だったソフィー」エレクトラよ」

「友達『だった』てのは無いんじゃない」

六連星は大げさに肩をすくめた。

友達——ってことは、彼女もあの世の人間なのか。だから、ぼく
のことが見えるわけだ。

『なあ、レイン」セイファートって名前は……』

「それは、わたしのあの世での名前よ。彼女のソフィー」エレクト
ラっていうのもね」

何だか外国人のような名前だ。

怜音は六連星を思い切りねめつけた。

「で、何であなたまで実界に来たの？」

「そりゃあ、キミを連れて帰るためさ」

六連星の短い髪が肩の上で揺れる。彼女の格好や言葉遣いは、ど
こか男じみているものがあつた。

「みんな心配してるんだから。さあ、レイン。帰ろう」
「嫌よ」

六連星の心配を怜音は一瞬で一蹴した。六連星の表情に影が差し
た気がする。少し同情してしまう。

六連星は、ふうとため息をついた。

「レイン、キミが帰れない原因は彼かい？」

彼女はぼくを指差した。

「浩哉はわたしの守護霊よ」

「へえ、彼がキミの……」

六連星は値踏みするような目つきでぼくをじろじろと見た。時折
うんうんと頷き、鼻で笑った。

「瀬戸内浩哉くん……だっけ？」

『……なんだ？』

「キミにレインが護れるのかな」

『どういう意味だ？』

「レイン」セイファートはキミごときの手におえる人間じゃないっ

てことさ」

六連星の口の端が吊り上がり、にやりとした笑みが浮かぶ。しかし、笑っているのは口だけで、目は全くといっていいほど笑っていなかった。

その目には覚えがあつた。それは一昨日、黒丸がぼくに向けた目。

——お前なんかになんか出来るのかよ。

非難。責めるような目。言葉とともに蘇る記憶。

彼女も——六連星も、ぼくに対して怒りを抱いているのだろうか。いったい、ぼくが何をしたというのだろうか。ぼくは……ぼくはただ、怜音の守護霊として——

「ソフィー！」

怜音が叫ぶのと同時に、光の弾丸が天を切り裂いて降ってきた。

——あれは怜音の“断罪”^{ジャッジメント}だ。

光の弾丸は迷うことなく、六連星に激突した。びりびりとした衝撃が空気を伝わり、脳髓を揺さぶる。一瞬のうちに視界は白に染まり、他に何も見えなくなってしまった。

だが、その失われた視界の中で軽やかな声が踊った。

「レイン、少し弱くなつたかな」

いたずらをした子供が親の反応を窺うような声。白い光が晴れた時、六連星奏風はにこりと笑って立っていた。

「まあ、ボクも上級裁判官だし。キミの技を受け止められる力はあるさ。……でも、こんなことで取り乱すなんて、キミらしくないね」

その時、授業開始を告げるチャイムが鳴った。六連星はくると背を向けると、手すりのところまで歩き、その上に立った。

「キミたちに伝えなくちゃいけないことがあつたんだ」

彼女は手すりの上で数回ジャンプをすると、混じり気の無い笑顔をぼくらに向けた。

「明日の夜、あの世の人たち総動員でキミらを捕まえるから。ボクはそれを言いに来ただけ。それを言つただけに転校生気分を味わうのも、まあ悪くなかつたね」

『六連星、それはどういう——』

「あ、浩哉くん。キミはもう少し事態を把握しといた方がいいね。だって——」

にやり、と。六連星の唇の端が吊り上った。

「レインは『まだ“断罪”^{ジャッジメント}を撃てる』よ」

白く眩しい光が視界一杯に広がった。眩い光を防ぐために腕を目の前にかざす。しかし光は一瞬で消え失せ、眼前にはさつきと変わらない光景が広がっていた。

ただ一つ異なる点は、六連星奏風がいなくなったことだけ。

「明日が最後の戦いね」

怜音の言葉はぼくの耳に入ってこなかった。

それは六連星の言った最後の言葉が、まるで耳栓のようにぼくの耳に入り込んで取れなかったからだだろう。

——レインはまだ“断罪”^{ジャッジメント}を撃てる。

それは怜音が“まだこの世の人間になっていない”ことを示している。

怜音は五日だと言った。そして、もう四日が過ぎた。いくらなんでも、遅すぎだ。

言葉の塊が心の水面に落ち、幾重もの不安の波紋がぼくの心をひどく揺らした。

四日目終了

残り一日

四日目（１）：あの世からの転校生（後書き）

えーっと……ここまで読んでくださった読者のほとんどが思われているかもしれない。「何で『三日目』と『四日目』だけこんなに短いんだよ」と。

一応、短くなった理由（言い訳）はあるんですが、興味のない方は完全無視して構いません。ていうか、ホントどうでもいい話なんで

以下、言い訳←

この小説は『五日間』という短い期間の話ですが、それでもやはり、『中たるみ』というものが生じてしまいます。怜音と浩哉には全力で五日間を駆け抜けてほしかったので、話の大筋に関わるものだけを書きました。それが『三日目』と『四日目』です。

……ただ、話のネタが思い浮かばなかったというのもあります。すいません。

さて、言い訳タイム終了。次回から最終日である『五日目』が始まります。

怜音はこの世の人間になれるのか？

六連星の思惑は？

そして、浩哉は最後まで怜音を護り切れるのか？

とにかく、物語の真実が明らかになります。

最終話までお付き合いいただけたら幸いです。

五目目（1）：奏でられた鎮魂歌（前書き）

いよいよ物語はクライマックスに入ります。

五日目（１）：奏でられた鎮魂歌

いよいよこの日がやってきた。思えばとても密度の濃い、そして筆舌に尽くしがたい五日間だったような気がする。でも、そんな日々も今日で終わり。それは感慨深くもあり、また、二度と考えたくないものだ。

「なにエピソード気分浸ってんのよ」

「……お前ってさ、人の心とか読めるの？」

町が夜の色に染まった頃、ぼくと怜音、そして白丸と黒丸は学校へ向って歩いていった。いつも見慣れたその通学路は、今は魔界に繋がっているような物々しさを感じる。一步前へ歩くごとに身が闇に沈んでいく。重く暗く、まるで粘土の海を泳いでいるようだ。しかも、灯台の光はなし。それは絶望に似た気分だった。

「これから本当の絶望を味わうのに、今から絶望してどうするのよ？」

「だから、人の心を勝手に読むなよ！」

「あなたの心が単純な構造だから読みやすいのよ」

「……頼むから、これ以上ぼくを絶望させないでくれ」

これ以上暗い気分になったら、多分ぼくは鬱になつて家に引き籠もってしまうだろう。せつかく勇気を出して外に出てきたというのに。……なんだかこれでは引き籠もりみたいだ。

「でも、あなたが家にいたら、あなたの家が戦場になっちゃうわよ。それでもいいの？」

「だから、人の心を読むなと何度も——」

「いいかげん諦めなさい」

諭された。なんだかよく分からないけど、怜音に諭された。

「頼むから、これ以上わたしを失望させないで、絶望くん」

「「絶望くん」って、ぼくのことか！？」

「いいこと、滅亡くん」

もはや、「ぼう」ってついたら何でもよくなってきたな。

「あの世の連中、今度は本気で来るわよ。一目や三日目の比じゃない。圧倒的な力をもって、圧倒的にわたしたちを叩き潰してくる。町中で奴らと戦闘になったら、町が戦場になっちゃうわ。だから、わたしたちはなるべく人がいない、広いスペースで奴らを待ち構えていなくてはならない。ここまでは分かるわね？」

「その広いスペースが、学校の校庭ってわけだろ」

「そのとおりよ、某くん」

「なんか名前わかんない人みたいじゃねえか！」

そんなやりとりをしている間に、学校の校門の前までたどり着いた。夜の建物の中で学校と病院ほど怖いものはないなと思いつつ、ぼくは校門をすり抜けて中に入った。怜音と白丸は校門をよじ登って校庭に足を踏み入れた。

ひっそりとした空気が身を包む。沈黙が耳に痛い。街灯は消えかけていて、校庭に明かりが入ってこない。田舎の町の夜はこれだからいけない。せめてコンビニの明かりなどほしいものだったが、明かりといえば、煌々と夜空を照らしている月や星くらい。そして、《灯籠山》に集まっている火の玉だけだ。学校と灯籠山はけっこう離れているが、頂上付近に集まる火の玉は遠目でもよく見える。火の玉たちはまるで踊っているかのように、夜空を縦横無尽に駆け巡っていた。

「歌ってるよう……」

「えっ？」

「火の玉たち。あれ、何か歌ってるように見えない？」

「何かって？」

「鎮魂歌^{レクイエム}。天乃川怜音の……ね」

怜音は頭を下げて地面を見つめた。おそらく表情は変わっていないだろうが、頭を下けているため、どこことなく影が差しているように見える。

それ以上、彼女は何も言わなかった。ぼくの方も黙っていた。沈

黙は、もう痛くは無かった。

どれくらいの時間が経っただろうか。校舎に備え付けられている大きな時計を見ると、時刻は十一時少し前だった。

『来た』

黒丸が呟いた。呟いた直後には眩い光が視界を覆い、ぼくは思わず目を閉じた。やがて瞼の裏で光が収まるのを感じ、ぼくは目を開けた。

開けなければ良かったと後悔した。

視界に入ってきた光景を、夢だと思ったかった。いつそ、この五日間が夢であればよかったと思った。

夜空を埋め尽くす使者の大群。月の光も星の光も、奴らによって遮られてしまっている。幾百、幾千のあの世の人間たちは、大量の死者を迎えに来た天使、もしくは死神のように見える。けれど実際は、怜音ただ一人を迎えに来たのだ。

圧倒的な力で、圧倒的に叩き潰す。

叩き潰される前に、既に圧倒されてしまっているぼくがそこにいた。

「一日ぶりだね、浩哉くん」

使者の集団の中から、六連星奏風が現れた。

『六連星……』

「できればソフィー、って呼んでほしいかな」

六連星は微笑みながら地面に舞い降り、怜音に向って右手を差し出した。

「迎えに来たよ、レイン」

怜音は彼女を一瞥し、ため息をついた。やってられない、とでも言わんばかりだった。

「こんなに来るなんて、わたし一人のためにご苦労様ね。……でも、答えはノーよ」

「そっか……」六連星は残念そうに俯いた後、につこりと笑って顔を上げた。曇り時々晴れ。表情のころころ変わる女だ。怜音と正反対だな。

「じゃあ、実力行使だね！」

六連星の背後に控えた使者の大群が、不気味に揺らめいた。しかし、それよりも速く、ぼくと黒丸は動いていた。

五日目（２）：すべてはあなたのために

先手必勝。それは黒丸と何度も打ち合わせていたことだった。

相手は大群で来る。その数は予想できないが、それを想像しても無駄だ。おそらく想像を絶する多さだから。

『だから先手必勝なんだよ』

相手より早く動き、速く動く。不意討ち上等。卑怯と言われようが何と言われようが、それしか生き残る術がないのだ。ただし、そこには絶対条件があった。

——怜音は必ず護ること。

それは守護霊として、そして何より瀬戸内浩哉の信念として、必ず守り貫かなければならないものだ。たとえ我が身を犠牲にしても、彼女だけは護り抜く。そう心に決めていた。

だから行動に迷いはなかった。右腕を日本刀の形状に変化させ、敵の大群に突撃する。不意討ちを受けて面食らう使者たちの表情が、コマ送りで視界を駆け抜けていく。ぼくは無我夢中で右腕を振った。何かを切り裂く感触、何かを切り落とす感触、何かを切り刻む感触。その感触一つ一つが右腕を伝い、脊髄を震えさせ、脳髄を痺れさせる。もはや考えることは出来なくなっていた。ただ視界に入り込んだ敵を切り捨てるのみ。それでも、心の片隅では一つの言葉が残っていた。

——怜音を護れ。

視界の端に怜音を捉える。彼女は《断罪》ジャッジメントを小さくしたような光の球を幾つも体に纏い、敵を退けている。

ぼくの首に巻き付いている赤い糸からは、力は流れ込んでこない。彼女も戦うことで精一杯なのだろう。ぼくに力を送る余裕は無いはずだ。ぼくは自分一人の力で敵と戦い、彼女を護らなくてはならな

い。

分かっていったことだ。こんなことは、事前に何度も確認したことだ。

黒丸が暴れている。校庭を縦横無尽に駆け巡り、その鋭い牙で敵を薙ぎ倒していく。あれなら当分、大丈夫だろう。

白丸は敵の攻撃を懸命に避けていた。体は生身の人間である瀬戸内浩哉なので、武器になるものは何一つ無い。しかし、まるでバネのように体をしならせ、嵐のような攻撃を避け続けていた。ぼくでは、あそこまで華麗に避け続けられないだろう。あらためて、白丸の身体能力の高さを思い知らされた。

ぼくも頑張らなくては。

だが、その思いに反して、体が徐々に重くなっていくのを感じた。右腕に力が入らない。足も棒になってしまったかのように動いてくれない。段々と、敵の攻撃を深く受け始めた。痛みが体中を駆け巡り、もはやどこが痛むのか分からない。それどころか、このままでは痛覚すら無くなってしまふほど、体中が痛覚に支配されてしまう。頭の中で乱気流が発生したみたいに、思考が統率されない。視界もぼやけてきた。焦点が定まらず、敵の数が増えたり減ったりする。まるで出来損ないの映画を観ているようだった。

そのうち、右腕が動かなくなった。同時に驚くほどの眠気が込みあがってきた。幽霊になってから眠気というものを一切感じなかったが、今はふかふかのベッドが恋しい。その身をベッドに預け、意識を深い暗闇に沈めたい。何も考えたくない。

……もう、疲れた。

「そこまでよ！」

凜と張った声。どんな目覚まし時計よりも強烈で、そして寝覚めの良い感覚を与えてくれる声。思考は冴え渡り、視界は澄み渡る。徐々に手足の感覚が戻ってくる。ただし、痛覚というお友達を連れ

て。

ぼくの、ぼくとしての機能が完全に戻りつつあった。

怜音の声に、引き戻された。

「ソフィー、あなたたちの負けね」

倒れた敵の数は相当なものだ。しかし、尚もまだ半分近くの敵が立っていた。黒丸は敵と共に地面に倒れている。おそらく、相討ちにでもあつたのだろう。

白丸は片膝を着いて、肩で息をしていた。疲労困憊といった様子。いくら身体能力の高い白丸でも、瀬戸内浩哉の体が持たなかったのだらう。

死屍累累ししるいといった、まさに阿鼻叫喚あびきょうかんの地獄絵図……とまではいかないが、その風景の中で一際目立っているのが、天乃川怜音だった。彼女の周りには、誰一人として立ってはいなかった。地面に懐なついているかのように、全員が倒れ込んでいるからだ。

怜音は学校に備え付けられている大きな時計を指差した。

「十二時過ぎ。これで五日経ったわ。——わたしたちの勝ちね」

見ると、確かに時計は夜中の十二時を過ぎていた。これで、ぼくが怜音の守護霊となつて、丸五日が過ぎたことになる。

六連星は静かに笑った。

「たしかにボクらの負けだよ。そしてキミらの勝ち。だけど、キミは負けだね、レイン」

「そうね……天乃川怜音は、ね」

怜音は六連星に向って歩き出した。観念したように両手を上げて、目を伏せ、けれど足取りは軽かった。

「怜音？」

「聞こえなかった、浩哉？ あなたとレイン〃セイファートは勝った。でも、天乃川怜音は負けたのよ。……いいえ、どちらにしてもわたしの思いどおりだから、わたしの勝ちには変わりないけどね」
『どういう意味だよ！』

「ソフィー、わたしはもう抵抗しないわ。早くあの世に帰りましょ

う」

六連星は怜音に手錠のようなものをつけた。

「あの子には何も言わなくていいの？」

「いいわ。さつさと行きましょう」

「さつきから何の話をしてんだよ！」

わけがわからなかった。まだ怜音の体はこの世の人間のものにな
っていないはずだ。だから、たとえ五日経っても、あの世の追っ手
から逃げる必要があるはず。それなのに怜音は今、自ら追っ手に捕
まった。しかも、勝っただけの負けただけの、意味がわからない。

思考が混乱の渦を巻いていた。

「怜音！　まだお前はこの世の人間になり切ってないだろ。だから、
まだ逃げなくちゃいけないはずだろ？　ここで捕まったらすべてが
水の泡だ」

「ソフイー、早く行きましょ」

「怜音！」

そこで初めて、怜音はぼくを見た。冷たい、何もかもを見下し――
何もかもを諦めているような目だった。

「もう、あなたはわたしの守護霊じゃない。白丸があなたの体から
出ていくから、あなたは自分の体に戻りなさい。そして、前と変わ
らない日常を過ごしなさい。元の生活に戻るのよ？　あなたが望
んでいたことじゃない」

「ふざけるな！」

思わず叫んでいた。

「こんな終わり方……こんな結末、こんなのはぼくが望んでいたも
のじゃない！」

「お前はこれでいいのかよ？　この五日間、何のための五日間だっ
たんだよ！　この世の人間になるために、お前だってあんなに苦し
んでたじゃないか！　本当に何のために――」

「すべてはキミのためだよ」
見ていられないよ、と六連星は言った。怜音とぼくの間に入り込

み、彼女はぼくを睨んだ。憎悪のようなものを孕んだ目だった。人からこんな目を向けられたのは初めてだった。

「ソフィー、あなたは――」

「レインは黙ってて」

有無を言わさぬ圧力が、その一言にはかかっていた。

六連星は再びぼくを睨みつけた。

「ボクたちが追っていたのは、本当はレインじゃない。ボクたちが追っていたのは――キミだよ。ボクたちの目的は、瀬戸内浩哉という存在の抹殺だったんだ」

五日目(3)：語られる真実

「そもそも、キミはいま存在してはならないんだよ。……だって、キミは一ヶ月前に死んでいたはずだもの」

滔滔と六連星は語り始めた。そこには何の表情もなく、また、その目は何も見ていないように見えた。

「一ヶ月前、キミは友達と一緒にキャンプに行ったよね」

『……ああ』

ぼくは記憶を呼び起こした。

たしかに夏休みの最後に、ぼくは友達とキャンプに行っている。守護霊になってから二日目——怜音を町の見学に連れて行ったあの日、京介と梨恵が怜音の前でその話をしていた。

「その時、キャンプ場の近くの川でキミは溺れかけた。でも結局、助かった」

ぼくの記憶を確かめるように、六連星は言った。ぼくはそれに頷いた。

だが、六連星はとんでもないことを言い出した。

「浩哉くん。あの時、キミは死んでいたんだよ」

『えっ……?』

思わず声が漏れた。

ぼくが……死んでいた? あの時に? バカな。たしかにぼくは溺れかけたが、後で息を吹き返したはずだ。

その時、怜音が六連星の肩を掴んだ。

「ソフィー、もうやめて。これはわたしの望んだことじゃないわ」

「でも、話さないと気づいてくれないよ。彼が気づいてくれないと、キミが報われないじゃないか」

「そんなのどうでもいいわ。早く帰りましょう」

「いやだ」

駄々をこねる子供のように、六連星は怜音の手を振り払った。

「浩哉くん、キミの霊を見ることのできる力——幼い頃に失った靈感、その靈感が戻ってきたのはいいいつから？」

『それは一ヶ月前から——』

言ってから、はっと気づいた。一ヶ月前。それは、ちょうど夏休みの最後。みんなでキャンプに行った時。ぼくが、溺れた時。

ぼくの驚いた表情を見てとって、六連星は「やっぱり」と呟いた。「きっとその時に臨死体験をしたから、反動で靈感が戻ってしまっただろうね。でも、そのおかげでキミはレインの守護霊になれた。

……なんだか皮肉な話だよ」

『六連星……たしかに、ぼくの靈感が戻ってきたのはあの時からだ。でも、それはあくまでも“死にかけた”からだろう？ “完全に死んだ”わけじゃない。現に、あの時ぼくは息を吹き返した』
「違う」

六連星の目の色が変わった。どんぐりのような二重の目は、いまや刃物のように鋭い双眸と化していた。真剣、というよりそこには様々な感情が渦巻いているように感じられた。

「浩哉くん、よく聞いて。あの時、キミは確かに死んだ。溺死だった。でも、キミは生き返った。なぜだかわかるかい？ それは、レインがキミを生き返らせたからだよ」

今度は声も出なかった。

怜音が——ぼくを生き返らせた？

「ボクたち裁判官は、死者の魂を天国、煉獄、地獄に振り分けるためにいる。けれど、時にして死者を生き返らせることもある。例えば、それが予定外の死だったとか、あるいはその死者にまだこの世でなすべきことがあったとか。そんな時は複数の裁判官たちが議論をして、生き返らせるか否かを決めるんだ。でも、キミの死については議論の余地は無かった。だって、キミの死は予定通りであって、キミがこの世でなすべき重要なことは無かったもの。だから、本当は天国行きだったんだ」

だけど、と言って六連星は首を横に振った。

「レインはキミを生き返らせた。無断でね。いくら上級裁判官でも、それは許される行為じゃない。そして、レインは地獄に監禁され、裁判官としての資格を剥奪された」

怜音がこの世に来たとき、黒丸と白丸から聞いた。

怜音は、あの世で罪を犯した。だから、この世に逃げてきた、とその罪というのは――ぼくを生き返らせたことだったのか。

「レインを監禁している間、裁判官たちは大騒ぎだった。なんせ裁判官が、しかも上級が、無許可で人を生き返らせたのは初めてのことであったから。空前絶後にして前代未聞だよ。そして、一ヶ月に渡る議論の末、一つの結論が出た」

「瀬戸内浩哉を殺せ、という……ね」

「瀬戸内浩哉は、あの日、死ぬはずだった。運命は捻じ曲げちゃいけない。だから、ボクたちはキミを殺そうとした。殺して、捻じ曲がった運命を元通りにするはずだった。でも、それも出来なかった。またしても、レインのせいだ」

六連星は横目で怜音を見た。怜音は何も言わずに俯いている。

「瀬戸内浩哉を殺すという結論が出たその日、レインは監禁されていた場所から脱走した。そしてこの世に、キミのところに現れた。その後、キミを自分の守護霊にした」

それが、あの日の夜だったわけか。ぼくが怜音に殺された日。そして、ぼくが彼女の守護霊になった日。

「ボクらはレインが脱走して、しかもキミを守護霊にしたなんて思いもしていなかった。だから何も知らないボクらは、まず下級使者二人をこの世に送った。でも、それはレインによって阻まれた」

ぼくが怜音の守護霊になって一日目、公園で怪しい男二人組に出会った。あの二人は、怜音を狙っていたわけじゃなかった。最初から、ぼくを狙っていたんだ。

「二人がやられて、ボクらは酷く驚いた。あの二人でも、キミを殺

すには十分だったからね。その後、ボクらはレインがキミを守護霊にしたことを知った。さすがに驚いたよ。だから、少し予定を変えた。『瀬戸内浩哉を殺せ。ただし、やむをえない場合、魂ごと殺してもよい。つまり、存在ごと抹殺してもいい』ことになった。そして、ボクらは再び使者たちを送った。今度は人数を増やして、ね。しかもレインが干渉できないように、人が大勢いるところを狙った。それは三日目のあの日。学校にいた時のことだ。あの時は、赤い糸を使って怜音の力を借り、黒丸と協力して撃退した。

「でも、それも駄目だった。キミは守護霊として格段に強くなっていて、しかも、他に黒丸がいた。ボクらは黒丸の力と、そしてキミの成長速度を見くびっていた。完全に油断していたよ。ボクらの完敗だった」

「……………」

「キミではなく、キミの体——つまり魂でなく肉体を破壊しようかとも思った。体がなければ、魂はあの世しか帰る場所がないものねでも、瀬戸内浩哉の体には、白丸の魂が入っていた。白丸は身体能力が卓越している。いくら体が瀬戸内浩哉だとしても、中身が白丸では容易には殺せない」

たしかに、白丸の身体能力の高さは、今さっきの戦闘からも窺い知れる。白丸は武器も持たずに、大勢の敵の攻撃をすべてかわしていた。これは並大抵のことではないだろう。

「そして今日、こんな大群を引き連れてキミ一人を殺しに来た。揃えるのに時間がかかってしまったのが、結局敗因になっちゃったけどね」

『ちよつと待て！　じゃあ五日っていうのは…………』

「そう、キミを殺すことのできる期間のことさ。あの世の人間ってのは少ないからね、あまりこういうことに人員を裂けないんだよ。ゆえに必要最低限の労力でキミを殺す必要があった。だから、期限は五日になった。五日過ぎればキミを見逃すことになってたけど、本当は誰一人としてキミが逃げ切れとは思っていなかった。……」

でも結局、これだけの人数を率いてもキミを逃がしちゃうもんね。意味無かったよ」

あはは、と自嘲気味に六連星は笑った。乾いた笑いが静寂の中に響き渡った。

「すべてはレイン」セイファートの思惑通り、つてわけ。まあ、レインを捕らえることは出来たから、目的の半分は達成かな」

『……待てよ』

この五日間が、すべて怜音の作り出した物語であることは分かった。

だが、六連星の話を延々と聞き、一つだけ——ただ一つだけ、腑に落ちない点があった。それは今までの話の根底にあるもの。すべての源といってよいもの。

『怜音……』

ぼくは六連星でなく、その後ろに隠れるように立っている怜音に言った。彼女は何も反応を見せなかった。いつもの素っ気無い態度も、無表情な顔も、身を凍らせる冷たい言葉も、何も出てこなかった。それはぼくを酷く不安にさせた。怜音が、怜音でなくなってしまうような気がしてたまらなかった。失うのが怖かった。

『怜音、聞こえてるか』

反応はまたしてもない。

ぼくはそれでも彼女に語りかけた。

『怜音、お前に聞きたいことがある』

反応はない。

だが、言葉がぼくの思考を無視し、紡ぎ出すのではなく口から溢れるようにして出た。

『どうして……どうしてぼくのことを護ってくれたんだ？ ぼくとお前は初対面のはずだろ？ どうして、ぼくを生き返らせてくれたり——あの世から脱走してまで、ぼくを助けにきてくれたり。辛いのに、この世の人間になるって言ったり。ぼくの修行に徹夜で付き合ってくれたり。どうしてお前は——こんなに優しいんだ？』

彼女にとってメリットは何一つない。それどころか、掟を破ってぼくを無許可で生き返らせるにしても、あの世から逃げるにしても、ぼくを助けるにしても、リスクは多かれど、彼女にとってメリットは何一つない。

いったい何のために。何のために、怜音はここまでぼくのためにしてくれるんだ。何で——彼女はこんなにも優しいんだ。

「キミが分からないのも、無理はないよ」

怜音ではなく、六連星が言った。ぼくを非難するような口調ではない。むしろ、悲しんでいるような、同情しているような口調だった。

「キミには大事な記憶が抜け落ちているんだ。でも、それはキミのせいじゃない」

六連星はポケットをまさぐり、何かを取り出した。それは角砂糖くらいの小さな正方形の物体で、水晶のように白く輝いていた。

瞬間、怜音が目を見開いた。

「ソフィー、それは——」

「浩哉くん、これはキミの記憶だ。十年以上前、ボクらはキミからある記憶を消した。けど、ボクが復元させといたよ。ありのままの記憶を。……それを、今返すよ」

「ソフィー、そんなことをしたら、あなたどうなるか分かってるの？」

「分かってるさ。どんな罰でも受けよう。でもね、レイン。この記憶を彼に返さないと、キミも彼も、真の意味で救われないんだよ」

「でも——」

「ごめんね、レイン、浩哉くん」

怜音が六連星の腕を掴んだ。しかし、それよりも早く、六連星はその小さな物体をぼくに向けて投げていた。それは月明かりを受け、空中に光の粒を投げ出した。くるくると、スローモーションのようにそれはぼくに向い、そしてぼくの中に吸い込まれていった。

かちり、と。

パズルの、最後のピースが嵌^{はま}った。ずっと無くしていた、最後のピースが。

刹那、ぼくの頭の中に映像が流れ始めた。少し古いフィルムを再生しているような、かすれて細部がよく見えない映像だったが、ぼくはそれを食い入るようにして見つめた。そして、ぼくは映像の中の世界に入り込んでいった。

五日目（４）：あなたの側にいるだけで

彼女はいつも部屋の片隅にいた。周囲と距離をとり、何もかもを拒絶し、そこに見えない壁を張っていた。周囲と彼女の間には深い溝があり、誰もその溝を飛び越えて彼女に近づこうとはしなかった。友達はもちろん、先生すらも彼女を見放していたような気がした。彼女は一人が好きなんだ。孤独が好きなんだ。みんなと遊ぶのが、嫌いなんだ。

——ぼくは、そんなのやだな。

そう思い、ぼくは彼女に近づいた。彼女は部屋の片隅で、みんなが読まなそうな難しい本を黙々と読んでいた。近づきたい雰囲気、そこにはあった。幼いぼくでもそれをひしひしと全身で感じた。しかし——

「なに読んでるの？」

ぼくは話しかけた。

一瞬、彼女は驚いたようにびくつと体を震わせ、本から目を離してぼくを見た。

その目は氷のように冷たく、しかし、限らない大空のように澄んでいた。ぼくは思わず、その目に見入ってしまった。吸い込まれてしまった、といったほうが正しいかもしれない。

「なにか用？」

彼女の目に見とれていたぼくの身に、突如として幾千もの氷柱が突き刺さった……気がした。ずぶずぶ。体の内側から凍っていく……気がした。

泣き出したい衝動を、懸命に堪えた。逃げ出したい気持ちを、必死に抑えた。

「な……なに……なに、読んで、るの？」

同じ質問を繰り返したはずなのに、一回目より酷く言葉が出なかった。まるで壊れかけたロボットのようにだと、我ながらへこんだ。

しかし、へこんだぼくをさらにへこます言葉を、彼女は容赦なく投げつけてきた。

「あなた、誰？」

お互いがお互いの質問に答ええないという、奇異な会話。その会話を变だと思えないほど、ぼくの意識は硬直していた。緊張ではない。恐れに近いものが、そこにはあった。彼女が怖いと、ぼくは本気で思った。でも、なぜか言葉が口から漏れ出した。

「ぼ、ぼくは……浩哉。瀬戸内、浩哉……」

「そう」

返された言葉はその一言だけで、彼女は再び目を本に戻した。彼女の読んでいる本はぼくの知らない字ばかりで埋め尽くされており、挿絵の一つもなかった。

どうして彼女はこんな本が読めるのだろう。

「これ、デンキっていうのよ、知ってる？」

「えっ……えっ……？」

「あなたが聞いたんじゃない。『なに読んでるの？』って」

本に目を落としたまま、彼女は言った。だが、ぼくには彼女がなにを言ったか理解できなかった。デンキ？ 電気を読んでる？ 電気って読めるの？

——そうだった。その当時のぼくは『伝記』という言葉を知らなかったのだ。

「そういえば……」彼女は本から目を離し、ぼくを見てきた。相も変わらず、その冷たい目で。「あなたの名前を聞いたのに、わたしが名乗らないのは失礼ね」

そこで彼女は本を床に置き、立ち上がった。目線がぼくと同じ高さになった。

「わたしの名前は、怜音^{レイオン}。天乃川怜音よ」

これが、ぼくと怜音の出会いだった。ぼくは五歳。怜音も五歳。

同じ保育園で育ったばかりだが、言葉を交わしたのはこれが初めてだった。

あれ以来、ぼくらは友達になった。初めて話したときは物凄く怖い思いをしたが、それ以後は彼女をそんなに怖いとは思わなくなっていた。普通に、友達同士の付き合い。

怜音は感情の起伏が乏しく、時々、怒っているのか喜んでいるのか、よく分からないことがあった。それでもぼくらは友達として――格別仲が良かったわけではなかったが、悪くはなかったと思う。ぼくと怜音の間に関しては、特筆すべきものは何もなかった。ただ、ぼくと怜音が仲良くなりだしてから、周囲の目つきが変わったのは、幼いぼくでも感づいた。

まず今まで仲良くしてきた友達が、口を聞いてくれなくなった。「アイツと遊ぶなら、ぼくは浩哉ちゃんと遊ぶのやめる」と言われた。アイツとはもちろん怜音のこと、それはぼくにも理解できたが、ぼくは怜音と遊ぶのをやめなかった。

先生からも驚かれた。けれどその驚きは、今まで無口だった怜音が他人と遊びだしたことに對する驚きではなく、ぼくの行動に對する驚きだった。「あの子と遊んでいて楽しい？」なんてことまで言われた。ぼくは「楽しい」と即答したが、先生は首をかしげて、ぼくから離れていった。それ以後、優しくかったその先生はぼくを無視するようになった。

「わたしは生まれてきちゃいけなかったの」

怜音は時折、そんなことをぼくに言った。

「わたしは、ひょっとしたら人じゃないのかもね」とまで言ったので、ぼくは「怜音は人だよ。だって、みんなとおしゃべり出来るじゃん。おしゃべりできるから、怜音は人だよ」と答えたが、「バカ

ね。そういう意味じゃないわよ」と、軽く返された。

怜音が自分のことを「人じゃない」と言ったのは、怜音がぼくと同じで『幽霊が見えるから』かもしれないと、幼いぼくはそう思った。でも、幽霊が見えることが人ではないことに繋がるなら、ぼく自身も人ではないのではないか、とも考えた。結局、頭が痛くなつたので考えるという作業は中断——というか挫折したが。

——今思えば、怜音がそういったことを言うのには、もう一つ理由があった。

彼女は周りの人間から、そして両親からもよく思われていなかった。それは彼女の性格や行いが悪いわけではない。むしろ彼女は年齢の割に大人びており、利発な子だった。彼女が嫌われる理由は無かった。

だから、だろう。怜音が時折自分を卑下することを言ったのは。きっと——いくら頑張っても、いくら良い子であっても、周りが認めてくれないのは自分がどこか悪いから。自分が変だから。周りの人たちと、違うから。異質だから。存在そのものが、異端にして異常。

ゆえに、「人じゃない」と。

怜音とまともに話せるのは、ぼくだけだった。

怜音は我が強い性格だったので、遊びの主導権は常に彼女が握っていた。といっても、遊び仲間はぼくと彼女の二人だけだったので、遊びの種類は限られていたが。それでもぼくは飽きずに彼女と遊んだ。他の友達が大勢で遊んでいようが関係なかった。ぼくのいるべき場所は怜音の側だと、思っていた。

——やがて一年の歳月が過ぎ、ぼくらは小学生になろうとしていた。

「今日は趣向を変えるわ」

小学校入学の一週間前、灯籠山へ登る階段の前で、怜音はぼくに言った。「シュコウ」という言葉の意味がわからなかったが、ぼくは首を縦に振った。

怜音とぼくは同じ小学校に通う予定だった。それはぼくにとってとても嬉しいことだった。心の中は桜が満開。怜音の側にいる限り、その桜は永遠に散ることは無いだろう。

怜音は階段を上り始めた。ぼくも後に続く。階段は険しく、その上整備されていないため、草木が生い茂って足元が見えない。淡々と前を歩く彼女から離れまいと、ぼくは必死になってその階段を上った。

どれくらいの時間が経っただろうか。けっこう長い時間、階段を上っている気がする。

その時、先頭に行く怜音が止まった。

「ついたわ」

彼女は振り返り、ぼくを見た。ぼくは最後の力を振り絞って、残り数段を飛ぶように駆け上がった。

そこは開けた空間になっていた。灯籠山にこんなスペースがあるとは思っていなかった。ここでなら、誰にも邪魔されることなく遊べるだろう。怜音の考えていたことは、このことだったのか。

しかし、怜音は持ってきたボールを地面に置き、側にあった大きな岩に座り、山の下に広がる町を見下ろした。ぼくも彼女の隣でその風景を見た。

いつも夜中になると、この山には沢山の火の玉が集まるが、今は昼。なんでもない、見慣れた町並が眼下には広がっていた。しかし、こうやって見下ろしてみると違うものだ。

通っていた保育園。これから通う小学校。ぼくの家。怜音の家。いつも遊ぶ公園。通いなれた児童館。

それらは手のひらに収まるくらい小さなもので、でも、間近で見るととても大きくて……。今ならこの町も、自分たちも未来も、怜

音と一緒にいることの幸せも、すべてこの手で掴めるような気がした。

「ねえ、浩哉」岩に腰掛けて町を見つめながら、怜音は言った。「どうして、あなたはわたしに話しかけたの？ あの時わたしに話しかけなきゃ、いまごろあなたは大勢の友達に囲まれて遊んでいるはずだわ。でも、いまはこうやってお喋りする相手はわたしだけ。そんなの、悲しくない？」

これは予想外の質問だった。なぜなら、今までこんなことを考えたことがなかったからだ。友達に遊びの輪から外されようが、先生に無視されようが、怜音といれば幸せだったから。それに怜音と友達になったから、こんなことが起こったとは限らないじゃないか。どうして怜音がそんな心配するんだろう。

「そんなの関係ないよ。だってぼくはいま、とっても幸せだから」
ぼくの語彙は彼女よりも圧倒的に少ない。頭の良さだって、彼女とくらべたら絶対的に劣る。この言葉が、ぼくの気持ちを表現できる限界だった。

——時間が二人を包み、流れていく。ゆっくりと歩調を緩め、二人のリズムに合わせるように。

真っ赤な夕焼けが空を染める。一番星がきらりと顔をのぞかせた。人も鳥も太陽も、帰るべき場所に帰る時間。

「……そろそろ帰ろっか」

灯籠山にも、一つ、また一つと火の玉が集まってきた。ぼくは地面に転がっているボールを拾い上げ、階段に向って歩こうとした。「待つて」

ぼくの歩みは、ずっと止まった。怜音が服の裾を掴んでいた。
「帰らないで。もう少し、一緒にいて。一人が、怖い……」

最後の一言には、彼女の本音が詰まっていた気がした。触れたら壊れてしまいそうな、本音。しかし、決して弱音ではない本音。

ぼくは再び怜音の隣に座った。

「だいじょうぶ。怖くないよ。ぼくが……護^いつてあげるから」

俯いた彼女は小さく首を縦に振り、ぼくの胸に顔をうずめた。

この時、たしかに思った。

怜音の言葉やぬくもり、それがたまらなく愛^{いと}おしかった。護^いつてあげたいと思った。無論、彼女の方が大人で、ぼくより聡い。だから、ぼくが怜音を護るだなんて分不相応なことだ。

だからこそ、思った。

だからこそ——護れる力が欲しいと思った。

町は深海のように静まり返り、ぽつりぽつりと優しげな明かりがそれぞれの家から溢れていた。

五日目（5）：得たものと失ったもの

光が瞼の裏に広がる。もう既に太陽は地平線の彼方に沈んだはずでも、この光は街灯の光とか、そういう人工的なものではない。温かさや優しさを含んだ、そんな光だった。直視しても、眩しいとは感じないだろう。

ぼくはそう思い、瞼を開いた。

ここで初めて、自分が寝ていたことに気づいた。

「怜音！」

隣に怜音はいなかった。岩の上には、ぼく一人だけだった。

「怜音！」

護ると約束したばかりなのに。

泣きたくなる気持ちを押さえ、彼女の名前を叫んだ。周囲を見回したら、意外にもすぐに怜音の姿を見つけることが出来た。

彼女は開けた空間の真ん中にぽつりと立っていた。吸い込まれるように空を見上げている。

「怜音！」

三回呼んだにも関わらず、怜音は何の反応も見せなかった。それは彼女の性格が素っ気無いからではない。何かを見つめていたからだ。

唐突に、眩い光が空から降りそそいだ。光は開けた空間に舞い降り、そこから一人の大人の女性が現れた。

流れるような銀髪に、琥珀の瞳。立ち姿を含め、怜音そっくりだ。無数の火の玉が揺れ踊る。まるでその女の人を歓迎しているみたいだった。

「長い間、待たせてごめんなさい。辛かったでしょう、レイン」
女の人は怜音に優しく微笑みかけた。万物全てを優しさで許すような笑みだった。

そして次の瞬間、ぼくは信じられない光景を見た。

——怜音が泣いている。

銀色の涙の粒が彼女の頬を伝い、地面に流れ落ちる。

気丈な彼女は、いままで一度も人前で涙を見せたことはなかった。どれだけ辛い目に遭おうとも、どれだけ悲しい思いをしようとも、彼女は絶対に弱さを見せなかった。

その怜音が、周りの様子を気にすることもせず、泣いていた。その涙には彼女の想いが、一粒一粒に込められているようだった。

「お母さん……」

怜音はそう呟き、女の人を抱きしめた。女の方は怜音の頭を優しく撫でた。

「あなたは、本当は天界——あの世の世界に生まれるはずだった。でも、生まれる前に魂がこの世に流されてしまったの。今まで気づかなくてごめんなさい……」

女の方は怜音を抱きしめた。決して強くはなく、しかし、優しく包み込むように。

「本当に辛かったでしょう。あなたはあの世の人間ですもの。この世の人間から見れば、受け入れがたい違和感のようなものがあったのでしょう……」

女の方は怜音の頭を撫でながら、ぼくを見た。ぼくは思わずその瞳に見入ってしまった。いまだかつて、こんなにも慈愛に満ち溢れた目をした人には出会ったことがなかった。

「あなたはレインのお友達？」

「……はい」

「……あなたは霊が見えるのね。とても特別な力を持っている。だからレインに違和感を覚えなかったのね。でも、その力のせいで辛い目にもあったでしょう」

辛い目——

それは、お母さんに『せいしんか』というところに連れて行かれたことだろうか。あれは、たしかに嫌だった。先生を含め、すべての人がぼくを変な目で見てきたからだ。ぼくはただ、そこに立って

いた影のない人に話しかけていただけなのに。

一瞬だけ、そんなことを思い出した。けど、

「いやなことも、ありました。でも、とってもいいこともありまして」

それは彼女に——怜音に出会えたこと。それは他の憂鬱なことすべてを吹き飛ばすくらい、ぼくにとつて大きなことだった。

女の人は優しい口調で言った。

「でもレインは、本当はあなたたちとは違う世界の人なの。だから、元の世界に帰らなくちゃいけない。……わかるかな」

「はい……」

人も鳥も太陽も、帰るべき場所がある。怜音も、ようやく帰る場所を見つけたようだ。それはとても幸せなことだ。

「怜音が幸せなら、ぼくも幸せです。だから、ぼくは悲しくないよ」

「……偉い子ね、あなたも」

女の人は聖母のように微笑んだ。

「さあ、レイン。浩哉くんにお別れしなくちゃ」

怜音は涙をこしこしと拭き、ぼくを見た。まだ涙の浮かんたその目には、普段の冷たさは欠片も感じなかった。

「浩哉……」

震える声で、彼女は言った。絞り出すように、かすかな声で。

「いままで……ありがとう」

そして、怜音は光の中に消えていった。それは一瞬だった。もう彼女はこの世にいないと、幼い自分でも理解できた。

女の人は再びぼくを見て、言った。

「レインはこの世に生まれてくるはずではなかった。だから、レインに関わったすべての人の、レインのことに関する記憶だけを消させてもらいます。浩哉くん、ごめんね……。あなたの記憶も消さなくちゃいけないの。でも、レインは一生、あなたのことを忘れないと思うわ」

「ぼくも絶対、怜音のことは忘れないよ」

「……そうね」

女の人は一瞬、悲しそうな表情を見せた。そして両腕を広げた。光がぼくを包み込んだ。いや、おそらくこの町すべてを。でも悪い心地はしない。その光は慈愛のような温かさに満ち溢れていたのだから。

「いままでレインと仲良くしてくれてありがとう。お礼に、あなたの特異な力を封じ込みました。これで、あなたも辛い思いをするとはなくなるはず——」

優しい声は、そう言い残して消えていった。

その声に耳を傾けながら、ぼくは怜音のことを考え、それから一週間後のことを考えた。

一週間後には、小学校の入学式だ。毎日、怜音と一緒に学校に行つて、怜音と一緒に勉強や遊びや、いろんなことができる。友達だつて、小学校に入ればいつぱいできるさ。先生だつて、いい人がいつぱいいるはずだ。

だから……もう、泣かなくて済むよ。

——そして、ぼくは怜音のことをすべて忘れた。

「もうこんな時間だよ。お母さんに怒られちゃうよ」

「うるさいわね、京介。置いてくわよ。今日こそ『ヒノタマ』つてやつを見てやるんだから」

「待つてよ、梨恵」

どこからか二人分の声が聞こえてきた。

いや、それよりもぼくはここで何をしていたんだろう。一人でボールを持って、こんな誰もいないところで。

声はだんだんと近づいてくる。そして——

「やつと頂上だ——！　つて、ん？　あなた、だあれ？」

見知らぬ女の子にいきなり話しかけられた。いや、それよりもぼ

くは何でここに。そして、なんでボールを持っているんだ。このボール、ぼくのじゃないのに。ていうか、ここはどこ？

頭の中に色々な疑問が浮かんでは消え、ついに脳内回路がショートした。

ぼくは思わず駆け出した。この意味のわからない事態から脱出するために。ぼくのショートした頭は、そんな答えを出した。しかし、それはたった二秒で撃沈した。

転がっていた石に躓いて、思い切りこけたからだ。

「だいじょーぶ？」

さっきの女の子がしゃがんでのぞき込んできた。転んだおかげで、うまく体が動かない。逃げることができない。

「あたし、梨恵。で、こっちのノロマは——」

「俺はノロマじゃねえ。京介だ。お前は？」

ぼくの頭の中はようやく落ち着いてきた。とりあえず、返すべき言葉が口から出てきた。

「ぼくは浩哉。瀬戸内、浩哉」

「そっか、浩哉っていうんだー」

女の子はにこにこ笑った。なぜか久しぶりに、こんな屈託のない笑顔を見たような気がした。

「今日から、あたしたち友達だね。よろしくね、浩哉」

——こうして、ぼくは今に至る。失ったものも、失ったことも知らずに……。

五日目（6）：ナミダのわけ

小一時間、意識を失っていたような気がした。けれど本当は一瞬の出来事で、現実の時間は先ほどとまったく変わっていないかった。

深夜の十二時過ぎ。

過去の失われた記憶から十年以上の歳月を経て、ぼくの意識は今に戻ってきたのだ。

目の前には六連星、そして怜音の姿がある。無論、怜音の姿は十七歳の怜音であって、五歳の怜音ではない。しかし、その翳^{かげ}りのある表情はあの時と変わっていないかった。

六連星は怜音を庇うように前に出た。

「キミがレインに関する記憶を失っても、レインはずっとキミのことを想っていた。キミはずっと、レインに護られていたんだよ」

ぼくはずっと、怜音に護られていた。

たとえばくが彼女のことを忘れていても、彼女はぼくのことを忘れていなかった。そして、それが罪だと分かっているにもかかわらず生き返らせた。ぼくのことを護るためにこの世に来て、ぼくを守護霊にした。そして五日間、ぼくを護りきった。

——彼女はどんな気持ちだったんだろう。

自分のことをまったく忘れている男を、自らを犠牲にしてまで護って。寝る間も惜しんでぼくの修行に付き合っつて。吐くくらい辛い思いをして。あの世の両親や友人を裏切っつて。そして、その罰を受けることになっつて。

自分自身の無知さに腹が立った。あまりに愚かすぎて、自分自身を殺してしまいたい。彼女の表情、彼女の仕草、彼女の心、ぼくは何一つとして理解していなかった。彼女の抱えているものを、一緒に抱えてあげられなかった。それどころか、彼女にひどい言葉を投げつけたり、彼女の前で友人との思い出話をしたり、彼女を護るという大言壮語を吐いたり。

——護られていたのは、ぼくの方だったというのに。

ぼくの愚かな発言や振る舞いに対し、怜音は何て思っただろう。きつと、辛かっただろう。もうやめようかとも思ったかもしれない。すべてを話して楽になるうかとも思ったかもしれない。

でも、怜音はそうしなかった。

怜音の優しさが、それを許さなかった。

そう思うと、心の奥底が痺れたような感じになった。

『……………ッ』

思わず涙が零れた。ぽつり、ぽつりと。想いは言葉ではなくて、言葉にはできなくて、塩辛い雫となって溢れ出た。

こんなにもぼくを想っていてくれた人がいたなんて。

こんなにも愚かなぼくを、優しく護ってくれていた人がいたなんて。

たとえばくがそれに気づかなくても。

泣いても泣いても、涙はとまらなかった。

「浩哉……………」

か弱い声が聞こえた。それは震えていて小さく、儚く、静寂の中でも消えてしまいそうな声だったが、ぼくの耳にははっきりと聞こえた。

怜音の声。

六連星が後ろを振り向く。そこには、顔を上げた怜音が立っていた。瞳には何かをやり遂げようという強い意志が宿り、唇は強く結ばれ、手は握りこぶしをつくっていた。

彼女は一步、また一步、前に出た。そして六連星のわきを通り抜ける。

「浩哉」

今度の声は震えていなかった。けれどそれはまだ小さく、掠れていた。怜音らしい凜とした声とは、ほど遠かった。

「浩哉、わたし嬉しかった。あの時……保育園の片隅で、本当は震えていたの。一人が怖くて、他の人が怖くて、震えていた。震えを隠すために本を読んでいたけど、やっぱり怖かった。——あなたが話しかけるまでは」

怜音はまた歩み始めた。一步一步、ゆつくりと。彼女の周りだけ、時間の進み方が違うように思えた。

「あなたはわたしにとっての光だった。あなたと一緒にいるときだけ、とても幸せだったわ。でも、わたしは他人と話したことや遊んだことがほとんどないし、わたしと関わるとろくな目に遭わない。

——だから、あなたに辛い思いをさせたこともいっぱいあったかもしれない。けど、あなたはそんなわたしを見捨てないでくれた。一緒にいてくれた。それがすごく——嬉しかった」

その表情は憂いを帯びていた。今にも泣き出しそうで、普段の彼女からは想像もつかない表情だった。でも、それが彼女の本当の顔なのかもしれない。壊れてしまいそうなあやふやさを、あの冷たい瞳や言葉で隠していただけなのかもしれない。

やがて、怜音とぼくの距離は一メートルも無くなった。手を伸ばせば、彼女に触れられる。

しかし、ぼくの手は動かなかった。体が動くことを忘れてしまったみたい。

彼女はぼくの首筋に触れた。

「もう、これはいらないわね」

ぱさり、とぼくの首から何かが落ちた。

それは《赤い糸》。

いままでぼくの首を絞め続けていたものであり、同時にぼくが怜音の守護霊であった証。ぼくと怜音を繋ぐ赤い糸。いまは縮んでいて、ぼくの片腕くらいの長さになっていた。

「あの時、あなたはわたしを護ってくれた。だから、わたしもあなたを護った。レインⅡセイファートとして、あなたを護れた。だから、わたしは満足。でも——」

そこでぼくは初めて怜音の笑顔を見た。
けれど、その笑顔は涙で濡れていた。

「天乃川怜音として、ずっとあなたと一緒にいたかった……」

彼女の泣き顔を見るのは、これで二度目だった。一度目も二度目も、別れる時だった。

涙が——想いの雫が、月明かりを受けて美しく輝く。涙で濡れた彼女の顔は美しく、儚く、淡く——辛そうだった。

「今までありがとう」

涙が止まらない。悲しみの雫が視界を覆い、世界が滲んで見える。その世界の中で、ぼくは確かに彼女の泣き顔を見た。

「……さようなら、浩哉」

怜音はぼくに背を向け、歩き出した。

それを見た六連星は頷き、率いてきたあの世の軍団に退却の指示を出した。

全員が一斉に、夜空に昇り始めた。光が天から降りそそぎ、一人、また一人とその光の中に吸い込まれては消えていく。まるで空にぽっかりと白い穴が開いているようだった。

黒丸、そしてぼくの体から抜けた白丸もその後が続く。白丸がいなくなり、抜け殻となったぼくの体は地面に倒れており、まるで寝ているようだった。

怜音は振り返らなかった。彼女の後姿が天に昇り、どんどん遠ざかってゆく。光の中に入ってしまったら、彼女はもう戻ってこない。彼女との思い出は戻ってきたが、彼女は二度と戻らない。戻れない。……もう二度と、会えない。

『そんなの……いやだ。こんな別れなんて、望んでない……』

ぼくは落ちている赤い糸を拾い上げた。そのもう一方の先端を持つべき人は、この世から去ろうとしている。結ばれたはずの赤い糸は、切れてしまったのではなく、持ち手が手放してしまった。

彼女は幸せだろうか。

この世での生活は楽しかっただろうか。

ぼくを護り切れて満足だろうか。

そんなはず——そんなはず、ない。

『だってお前、まだ一度も笑ってねえじゃんか！』

叫ぶよりも先に、ぼくは飛び上がっていた。光に向って。

——怜音に向って。

五日目（7）：護れる力

ぐんぐんと、怜音の背中に近づく。だが、彼女はもう光の中に入りかけていた。手を伸ばしても、叫んでも、彼女には届かない。あとほんのわずかな距離がとても遠く感じられた。

それは希望を煽る、絶望的な距離だった。

すべてを諦めかけた。もう駄目だと、思考回路が停止を促した。

——ふざけるな！

諦めるな！ とにかく行動しろ！ 四の五の言わず動け！ 考えるのはその後だ！

『もうお前を失いたくないんだよ！』

何も考えずに、ぼくは右腕を怜音に向って伸ばした。それは当然届くはずもなく、その手は中空を空振りした。掴んだものは虚無。遠ざかる後姿。指先から力が抜けていくのを感じた。

その時——

ぼくの右手から赤い閃光が怜音に向って伸びた。

《赤い糸》。

それは持ち主の意思によって、伸縮自在に操れるもの。ぼくの想いが、赤い糸に乗った。

赤い糸は怜音の腕に絡まった。ぼくはすかさず、それを強く引いた。怜音がぼくに向って落ちてくる。呆氣にとられた六連星の顔が視界の隅を掠めたが、ぼくの瞳の中には怜音だけしか映っていないかった。

——このまま中空で彼女をキャッチする。
考えるよりも先に、ぼくは両腕を広げた。

だが、彼女はぼくをすり抜け、地面に向って真つ逆さまに落ちていった。驚いた彼女の表情が、コマ送りで視界を上から下へ駆け抜けた。

あの世の人間は、霊に触れられる。それは逆もまた然り。^{しか}霊であるぼくは、怜音を抱きとめることが可能はずだった。

そう、怜音が完全にあの世の人間であれば。

怜音はこの世の人間の体になろうとしていた。つまり、いまの彼女の体は、あの世とこの世の中間の能力を有している。

だから霊に触れられなくても、霊が触れられなくても、それは当然のことだった。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおつっ！』

ぼくは腹の底から叫んだ。腹の底から湧きあがった声は、空間そのものを振るわせた。

一直線に地面に向って飛び、怜音の落下を追い越す。

それは一瞬の出来事だった。

瞬きをしている隙に、すべてが終わるようなスピード。

ぼくは、倒れているぼくの体に――瀬戸内浩哉の体に入り込んだ。久しぶりの、自分の体。この五日間、白丸が毎日トレーニングを欠かしていなかったので（「浩哉さん、運動不足ですね」）、体は以前よりもわずかに逞しくなっていた。

ぼくは体に入ると同時に起き上がり、落ちてきた怜音を全身で受け止めた。怜音の体重に加え、落下の速度と重力が重なり、ぼくの体に衝撃が走った。ひよっとしたら腕が折れたかもしれない。だが、そんなことは気にしていられない。気にする必要はない。

怜音は、何が起ったか分からないといったような表情をしていたが、ぼくに抱きとめられたことに気づくと慌てて飛び退いた。

「な……なな……」

舌が回っていないようだった。彼女は顔を赤らめてあたりを見回すと、ぼくを指差した。

「な、なに？　どういうこと？」

「ごめん、やっぱり別れるのはいやだ」

につこりと、満面の笑みをぼくは浮かべた。うん。会心の笑みだ。呆気にとられていた六連星も、やがて地面に降り立った。

「六連星、悪いけどこれがぼくの答えだ。怜音はやっぱり渡さない。今度こそ、絶対に護るから」

「……キミ、元の体で——この世の人間の体で、ボクに勝てると思うの？」

やれやれ、と六連星は呆れた風にため息をついた。

たしかに冷静に考えてみると、この状況はぼくにとって絶対的に不利だった。あの世の人間の身体能力は、この世の人間の比ではない。ましてや、相手は上級裁判官である六連星^{むつらほし}奏風^{ソフイー}。傍から見れば、これは途方もないくらい絶望的だろう。

だが、不思議とぼくはこの状況に絶望していなかった。根拠はない。勝てる根拠はない——けど、負ける気はしなかった。

六連星はぼくを見て、それから怜音を見た。そして、急に何かを思い出したかのように、手のひらをぼんと打ち合わせ、笑った。

「レイン、さつき浩哉くんの——霊体としての浩哉くんをすり抜けたよね。ってことは、あの世の人間としての力が無くなったわけだ」
六連星は納得したように首を縦に振った。

「レインにはボクの姿ももう見えてないし、声ももう聞こえないはずだ。だって、キミはもうこの世の人間なんだから。……待てよ。ってことは、もうボクはレインを捕まえなくていいんじゃない。だって、レインはこの世の人間になっちゃったんだから」

うんうん、と再度首を振る六連星。ぼくらのことを無視し、勝手に話を進める。

「じゃあ、ボクはもうあの世に帰らなくちゃ。帰って報告しなくちゃね。『レインは、既にこの世の人間になってたから、追うのはも

「うやめます』って」

「六連星——」

「浩哉くん、レインをよろしく頼むよ」

六連星はそう言って、ぼくらに背を向けた。そして光に向って飛び立った。

「ソフィー！」

怜音は叫んだ。涙をぼろぼろと零し、それでも懸命に叫んだ。

「ありがとう！」

六連星は小さく手を振り、光の中に吸い込まれていった。光はそれで役目を終えたのか、すうと消えてなくなった。

月明かりと星たち、そして灯籠山に群がる火の玉たちが、再び夜空を照らし始める。その光は眠っている町を優しく愛^{いっく}しんでいるようだった。

——時間が二人を包み、流れていく。ゆっくりと歩調を緩め、二人のリズムに合わせるように。

ぼくは怜音を見つめた。彼女もぼくを見つめた。

「怜音——」

あの時約束したこと。それを果たすために随分と回り道をしてしまった気がする。けれど回り道をしている間にぼくは色々なものを拾って来た。それは時としてぼくを勇気づけ、時としてぼくを傷つけ、それでもぼくは確かに集めてきた。あの時のぼくに無かったものが、今のぼくにはある。彼女を護れるだけの力が——確かにある。そして、今なら確信を持って言える。

「これから、一緒にいてくれないか？」

「……ええ」

もう泣かなくて済む。

もう傷つかなくて済む。

悲しい思いはさせない。

辛い思いはさせない。

これからは笑って楽しく生きていけるよ。

心の奥でそう思いながら、ぼくは怜音を力の限り抱きしめた。
温かい優しさの涙が、二人の瞳からゆっくりと零れ落ちた。

五日目（7）：護れる力（後書き）

これで五日目は終了ですが、まだエピソード的な話が一つあります。つまり次が最終回です。間違えてこれで読み終わらないでくださいねw

最終話の更新は明日のお昼ごろです。ぜひ、最後までお付き合いください。

後日談（終）：その笑顔が見たくて（前書き）

最終話です。

後日談（終）：その笑顔が見たくて

「浩哉、今週の日曜日空いてるか？」

「ああ。空いてるけど、なんで？」

「あ、いや……ダブルデートしないか、ってさ。梨恵が」
「えっ？」

「実は……俺と梨恵、付き合うことにしたんだ。だからさ——俺と梨恵、そんでお前と怜音ちゃん、で、映画にでも行かないかって話だよ」

学校帰り。地元の商店街を歩きながらタイヤキを食いつつ、京介はぼくにこんなことを言い出した。

それにしても、京介と梨恵が付き合うなんて、ちょっと驚きだ。

あの二人、いつもなんかで喧嘩してるイメージが……。でも、『喧嘩するほど仲がいい』って言葉もあるしな。

「お前たちならお似合いのカップルだと思うよ」

そしてぼくはまた一口、タイヤキをほお張った。

六連星と別れてから三日が経った。

怜音の体はもうこの世の人間そのもので、よく食べるし、よく寝るようになった。あの世の人間の能力——霊に触れることや、飛べること、身体能力の高さなどは消えたが、霊が見え、話せる力だけは残った。だが、その力のせいで苦労したことはいまのところない。

黒丸と白丸は、すぐにあの世から戻ってきた。『ご主人を泣かせたら殺す』と、黒丸には冗談半分で笑われたが、隣にいた白丸の目は本気だった。あれは殺人者（犬だから殺人犬か？）の目だった。まあ、白丸は怜音に心酔しているから、しょうがないだろう。ぼくも十二分に気をつけることにしよう。

十月の風が身にしみる。上を見ると、雲ひとつない爽やかな秋空が広がっていた。それはどこか寂しく、しかし、人の気持ちを晴れやかにするものがあつた。悩み一つない空を見ていると、心が洗われるのだ。

けれど、ぼくの心は秋空のように悩み一つなく澄み渡っているわけではない。心の中には面倒な課題が山積みになって置いてある。例えば家のことについて。怜音は今のところ、ぼくの家に居候している。ちなみに、ぼくの両親に内緒で。このままではいつ露見してしまうかわからない。家問題は早めに解決しなければならぬ。それと、あの世のことについて。怜音の両親は、彼女がこの世の人間になってしまったことに対して、どう思っているのだろうか。結果的にぼくが彼女を奪ってしまったわけなので。ていうか、半ば^{なか}駆け落ちみたいなもので……。報復かなにかで襲撃されたら非常に困る。

ちなみに六連星奏風ことソフィー＝エレクトラは、黒丸＆白丸情報によると、どうやら軽い罪で済んだらしい。ぼくの記憶を勝手に復元してぼくに返したり、怜音のことを見てみぬ振りしたり、けっこう好き放題だった彼女だが、これは嬉しい情報だ。

結局、六連星はぼくらの味方だったわけで、彼女のおかげで助けられたことにもなった。彼女には、また会いたいと思う。怜音も友人に会えるのは嬉しいと思うし。

さて――

ぼくは視線を元に戻し、前を仲良く並んで歩いている怜音と梨恵の後姿を見つめた。

あれから怜音は感情を表に出すことが多くなった。まだぎこちない表情は多いが、それでもぼくは嬉しかった。

もう本当の気持ちを隠す必要はなくなったのだ。ありのままの自

分を表現できればいい。

そのうちきつと、屈託なく笑える日々が来るさ。

「浩哉！」

怜音は振り返って手を振った。そして、その手はちょうど怜音たちの隣に建っている店に向けられた。

「このカフェのコーヒー、すごくおいしいらしいわ。寒いし、温まりましょう」

「ん、わかった」

「もちろん、あなたの奢りね」

「何でだよ！ さつきタイヤキ奢ったばっかだろ！」

「わたしたち、付き合ってるのよね。男が奢るのは当然じゃない」

「それは必ずしも当然とは言えないぞ！」

たしかに、あれはぼくから告白したことになるのだろう……。だが、だからといってぼくばかりが奢るとはどういうことなんだ。高校生のお金事情を考えると。

「えっ、浩哉の奢り？ いくらなんでもそれは悪いよ」

意外なことに、梨恵が怜音に注意をした。

おお、あいつ気が利くじゃねえか。京介が彼女に選んだ理由も何だかわかる気がする。

「浩哉の全額負担は可哀想だから、ここは浩哉と京介の二人に奢ってもらいませよー！」

「そうね。それがいいわ」

「何でそうなる！」「何だそりゃ！」

叫びが京介とハモった。あんまり良いハモリとはいえなかったが……。

あきれ返るぼくたちをよそに、梨恵は楽しそうに店の中に入っていた。

「浩哉、俺らって女の尻に敷かれる運命にあるのかな……」

「……かもな」

意気消沈している男二人。傍から見ると、奇妙な光景に違いない。

怜音はそんなぼくらを不思議そうに見ると、

「二人とも、早く入りましょう」
と、微笑んだ。

——それはごく自然な微笑みで。けれど、ぼくにとってはとてもなく大きな意味を持つ微笑みだった。

「なあ、浩哉」店に入っていった怜音を見て、京介は呟くように言った。「彼女、よく笑うようになったな」

「そうだな」

「ダブルデートのこと、彼女に伝えといってくれよ」

「……ああ」

ダブルデート……か。そのことを怜音に伝えたら、怜音はどんな顔をするだろうか。

驚くだろうか。照れるだろうか。困惑するだろうか。それとも怒るだろうか（照れ隠しならいいんだけど……）。

でも——笑って喜んでくれたらいいな。

そんなことを思いながら顔を綻^{はら}ばせ、ぼくたちは温かい居場所の扉を開けるのだった。

完

後日談（終）：その笑顔が見たくて（後書き）

貴重な時間を割いてまで、この作品を読んでくださった読者の皆様、本当にありがとうございます。

この「今日から守護霊!？」ですが――

後書きを使って作品のことを語ってしまうと、私の場合、単なる自己満足になってしまうので、あえて何も書きません。作品の解釈は皆様のご想像にお任せします。ただ、この作品は私にとって分岐点のようなものになりました……ということだけは書いておきます。

あとがき更新（2008・6/9）

この小説の続編を書く、と去年あたりここに書き、そして現実書いています。しかし最近生活が忙しく、なかなか書く暇がありません。楽しみにされている皆様、本当に勝手に申し訳ありませんが、続編完成は未定とさせていただきます。

これから投稿する時は、全て書き終えてから順次に投稿していきたいと思っています（中途半端に更新され、そのまま放置なんて嫌ですしね）。

その時、また読んでいただけたら幸いです。
では、失礼します。

辻民

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7092b/>

今日から守護霊！？

2010年10月8日14時29分発行